修正十五版

吉田彌平 編

中學國文教科書 卷一

東京 光風館藏版

教科書文庫
4
810
41-1923
2000082067

41798
教科書文庫
4
810
41-1923
20000
82067

資料室

教科書文庫
4
810
41-1923
2000082067

文部省檢定濟
大正十二年十一月十六日　中學校國語科教科書

中學國文教科書

吉田彌平編

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000082067

4a
810
大12

Hiromu Ida

霧 キリ fog
霜 シモ frost
露 ツユ dew

広島大学
教
82067
図書

例言

本書は中學校國語科の講讀用教科書として、文部省で定められた教授要目に據つて編纂したものです。

本書の文章は口語文・文語文を主とし、これに若干の候文と韻文を加へました。

全卷を通じて中心になつて居るのは現代文です。なほ高學年に進んでは各時代を代表する文學の一斑をも示して文學史の大要を知らせる仕組にしました。

本書の句讀や送假名は國定小學讀本を標準としました。漢字の形體についても文部省の漢字整理案を參考しました。

地圖・繪畫・寫眞などで本文の理會に必要なものは成るべく挿入しま

した。肖像や筆蹟なども古人の俤を偲ぶよすがになるものは入れました。

候文・韻文は多く行・草の筆記體で出しました。筆者は阪正臣・大口鯛二・尾上八郎・岡山高蔭・三宅喜代太・三浦浩東の諸氏です。

各課の題目の下には作家の氏名又は氏號を記し、文の終りには出所を示して置きました。編纂の都合で原文の姿のかはつて來たものは只據る所のみを記して置きました。

原文に對しては十分の敬意を表しながらも、なほ多少の手を加へて體裁を整へねばならないことのありましたのは本書の性質上、已むを得ないことゝして、作家の寛恕を請ふ次第であります。

中學

國文教科書 卷一

目次

			頁
一	美しき日本		一
二	春の光	大和田建樹	五
三	鳥の聲	高濱虛子	六
四	桃山御陵に詣でて	八波則吉	一〇
五	乃木大將の舊宅		一六
六	燕	尾上柴舟	二一
七	ポチ	長谷川二葉亭	二三

八　東宮の佛國御巡覽その一……三〇
九　東宮の佛國御巡覽その二……三七
一〇　壯烈なる二勇士……四四
一一　捕鯨記……四九
一二　伊能忠敬の晩學……幸田露伴　五八
一三　立志……六六
一四　堪忍……柳澤淇園　六八
一五　霧島登山その一……田山花袋　六九
一六　霧島登山その二……田山花袋　七四
一七　田園の夏……杉村廣太郎　八〇
一八　涼味……德富健次郎　八五
一九　夏の夜……土井晚翠　八七
二〇　游泳場より友に……九〇
二一　笑話二則……九二
二二　五賢堂……九七
二三　明治天皇の御遺物……笠井信一　一〇一
二四　太白山の激戰……一一
二五　汝の母……一一七
二六　ナイヤガラの壯觀……黑板勝美　一二六
二七　お祭……北原白秋　一三三
二八　猫……夏目漱石　一三八
二九　十國峠……高山樗牛　一四五

三〇　月の天橋……徳富健次郎　一四八

目次終

中學

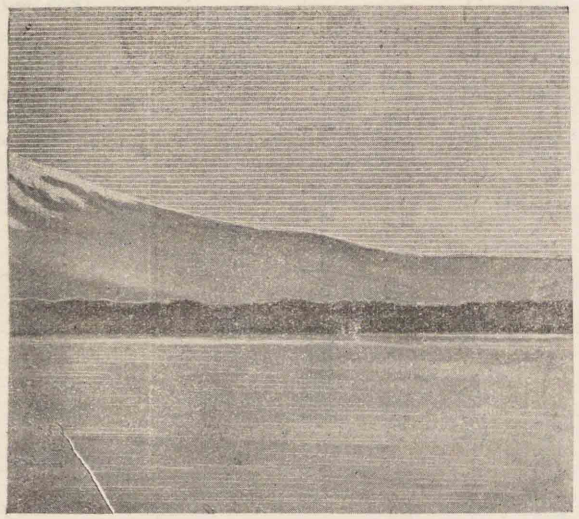
國文教科書　卷一

一　美しき日本

我が國は美しい國である、風景のよい處が甚だ多い。さうしてそのよいといふにもまた色々ある。或は華麗、或は優美、或は雄大、それ〴〵その趣がちがふ。

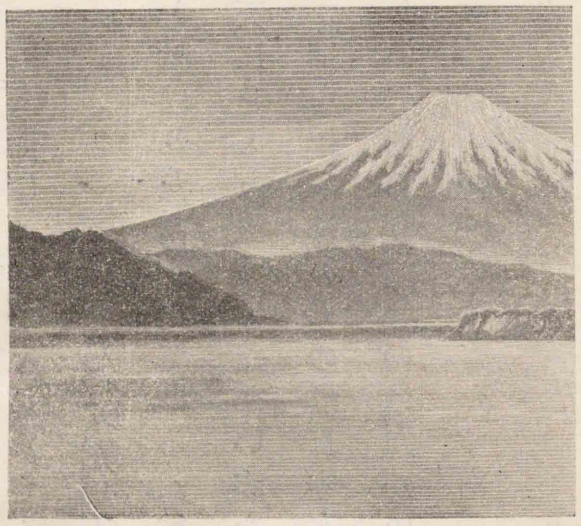
花の上野や嵐山、紅葉の高雄や日光、是等の風景は何れも華麗である。しかしその最も華麗なものといへば、やはり花の吉野山であらう。四月の半ばごろ、吉野山に登つて、一目

千本あたりから眺めると、峰といふ峰、谷といふ谷、見渡すかぎり一面に薄紅の雲か霞か。たゞもう、これは〳〵とばかり。何ともいふにいはれぬ美しさである。



富士

松島・嚴島・天橋立は日本三景と稱へられ、琵琶湖のほとりは近江八景とたゝへられて居る。是等は何れも優美な風景である。しかしそれより更に優美なのは舞子あたりの風景であらう。白い砂に青い松、



山

靜かな海に滑る船、眉墨の樣な山に盆石の樣な島、まるで一幅の大和繪。眺めて居る身もいつしか畫の中の人になつて居る。

雄大なるものは萬丈の煙が大空を衝いて立ちのぼる淺間山や阿蘇の峰、百雷の轟きわたる大鳴門・小鳴門、天上から天の河を切つて落したかと疑はれる華嚴の瀧・那智の瀧、さては地軸も折れよ大地も碎けよとばかり怒濤の打寄せ打返す金華山・犬吠岬な

どのながめであらう。

さうして此の華麗・優美・雄大の三つを兼ね備へた大風景が我が國には一つあるのである。それは何かといへば、

人問はゞいかゞこたへん、言の葉も

及ばぬ富士の雪のあけぼの

と歌はれた富士山である。彼の千古の雪を戴いて東海の天にそゝり立つけだかい姿を仰ぎ見ては、あゝ貴いといふ感情を起さないものは、日本人は勿論、恐らくは外國人にも無いであらう。このけだかい貴い富士の高嶺こそ實に我が大日本帝國のすがたである。

大和田建樹
國文學者
明治四十二年歿
年五十四

二 春の光

大和田建樹

朝

鶯しきりに鳴くは、うしろの藪なるべし。起きいづる頃は、春の霜半ば消えて、日影はや庭にあり。ねごこちよき頃にもなれるかな。豆腐賣る聲は今ぞ門を過ぐる。

柳陰

一もと柳の垂れたるかげに、床几ならべて團子を賣る。腰かけて煙ふく客あり。すゝぶりたる釜の下焚きつくるは主の老婆なり。日はまさに正午なるべし。牡雞一聲歌ひて、花は盆の上に散る。

渡頭

待てども人なく、渡守はつひに眠れり。鶯鳴けども覺めず。雲雀歌へども覺めず。油の如き春の水は、散り來る花を漂はせて、舟を洗ひ又岸を打つ。

水

山吹こぼれて、春の水淺黄に流れたり。此の水を漕ぎのぼし漕ぎくだす小舟二三艘あり。十四五の男兒は肌着一つになりて竿を取り、艪を操る。日は長し、未來は遠し。見る我さへ心自ら若やぐよ。（新文林・藻汐木）

三　鳥の聲

高濱虛子

寢床を出て、楊枝を使ひながら湖水の見える部屋にいつて見る。朝日が部屋一杯にはひつて居る。

高濱虛子
名ハ清
俳人
文學者
明治七年生
部屋
比叡山東塔ノ宿院

湖水と思はれる邊は雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼よりやゝ高く、やゝ低く、數知れぬ杉の梢が鉾のやうに突つ立つて居る。左手には北谷の向ふに當る杜が、鋸の齒のやうな杉を背に並べて湖の方に流れて居る。空氣がいやが上に清いので、近景の杉の梢も遠景の杉の杜も新鮮な色をして居る。さうしてその間を薄い霞が流れて居る。非常に靜かだ。自分の呼吸の外うき世の物音は何も聞えぬ。

たゞこの天地を我が物顔に啼きさへづつて居るのは小鳥

だ。何といふかはいゝ聲の小鳥があるものであらう。名が分らぬのが殘念だ。その杉の梢で一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で他の一羽が答へて居る。又遙か向ふの谷深く他の一羽が應じて居る。よく耳をすますと、なほ二三羽の聲がどこかで聞えるやうだ。

この小鳥の合奏を破るやうに、別な聲の小鳥が突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、また凜凜しい所があつて、その聲の空山に響く趣が何ともいへぬ。これも名は分らぬ。それが一羽ではない、三羽四羽と段々聲の主が殖えて來る。前の小鳥が縱糸ならこの小鳥は横糸だ。互に錯綜してよく諧調を保つ所が面白い。

突然けん〳〵とけたゝましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峰にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急調だ。山鳥でゝもあらうか。前の二つの小鳥で織りなした美しい絹をたゞ一聲に引裂いたかと疑はれる。暫くしてその聲は谷の底の底、峰の奥の奥に浸みこんでしまつて、あとはもとのとほり靜かになる。

眞先にその靜かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれる絣のやうに美しい。一つの絣が置かれると、また縱糸を織つて前の小鳥が啼く。また横糸を織つて次の小鳥が啼く。絣が鳴く。縱糸が鳴く。横糸が鳴く。この絹をまた山鳥が破るのかと思ひながら、待設けて居ると、不思議な聲が別

に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似て居て。谷の神社の鰐口が口をあけてつぶやくのかとも思はれる。他の鳥の聲々が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのが面白い。友は啄木鳥だらうといつた。二人の和尚は山鳩だらうといつた。

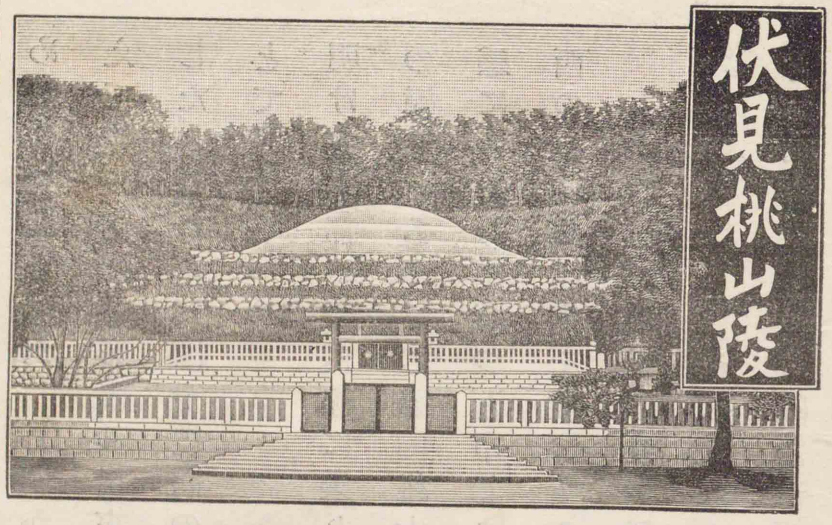
湖水の上にはまだ漠々とした白雲が漂つて居る。杉の梢を渡れる霧は少しづつ薄らいで來て、だん〳〵と谷が深く見えて來る。（新寫生文）

四　桃山御陵に詣でて

八波則吉

八波則吉
國文學者
當時ハ第四高等學校教授
現在ハ第五高等學校教授

母様。豫定の如く昨朝八時無事に歸宅致しました。



伏見桃山御陵

一昨日桃山の停車場から繪葉書でお知らせ申しました通り、此度當校の職員生徒合せて六百三十餘名、桃山御陵を參拜致しました。特別仕立の列車でしたから、途中は只四五個所の大きな驛に停車したゞけで、多くの驛を拔きにしたのは、北陸線では私に始

めての經驗でした。月明かに星稀に、氣は澄み心はさえて、終夜何とも形容の出來ぬ一種清爽の思に滿ちました。是も私には十幾回の旅行に曾て覺えのないことでした。

明け方京都で奈良線に乘りかへました。今しも東山の巓に登る朝日の姿。雄大、莊嚴、言語に絶した壯美の感に、吾知らずあつと申しました。顧みれば月はなほ西の空に淡い光を放つてゐるのでした。

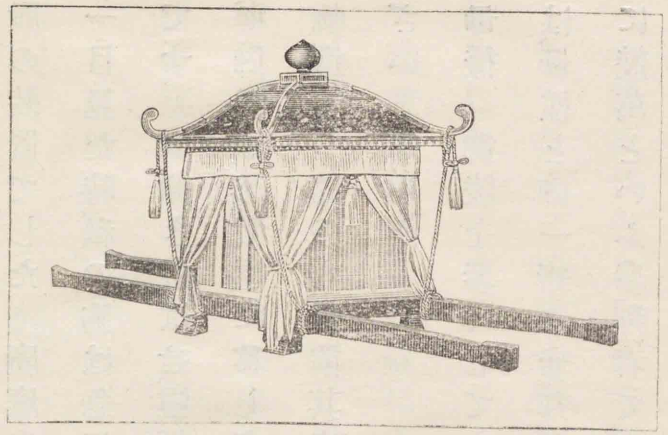
東の野に陽炎の立つ見えて、
かへりみすれば月傾きぬ。

といふ古歌もなるほどと合點されました。

桃山の停車場に着くや、直に私の胸を衝いたのは祭場殿の裝置でした。廣庭・白砂・假小屋・幔幕、凡そ是等を只一目見た時、私の胸は急に詰つて、眼鏡は忽ち曇つたのです。御聞き遊ばせ、靈柩を奉安して傾斜鐵道に依つて御陵の御須屋に移し奉つたと承る其の折の臺車も、軌道の一部分も、目前其處に据ゑおかれてあるではございませんか。

母樣。御陵を參拜してまづ何より先に思ひましたのは、母樣と御一緒に參拜したいといふことでした。日に幾萬といふ參拜者で、それは〳〵大した人です。子を連れた親、親の手を引く子、私は是非御一緒にと思ひ

ました。どうぞ御達者でいらしつて下さい。來春は必ず御供致します。



葱華輦を拜見したゞけでも非常に深い感じを起しました。まして遙に御須屋を禮拜した瞬間、森嚴崇高の感に誰一人打たれぬものがございませう。竹の林を出て、白砂をしきつめた御陵の廣庭に立つて、松青く鳥居眞白き山陵を伏し拜めば、知らず識らず敬

藤井先生
京都帝國大學教授文學博士藤井乙男

虔の情が胸に漲つて參ります。

京都で數時間自由散歩の時間を得ましたから、藤井先生を訪ねて、その御案内で下鴨へ參詣しました。夜の八時五十分東本願寺に集合して、九時過、再び夜行で歸途に就きました。六百餘名が蜘蛛の子をちらしたやうに京都の市中で別れましたが、定刻には一人も後れず集つたのです。

金澤の停車場前で、校長が一行に對して滯りなく參拜を遂げたことを喜ぶ旨を心から愉快さうに述べられました。そして解散したのです。

桃山には繪葉書屋が何百となく軒を並べてゐました。

土産物は繪葉書が重なやうです。そして繪葉書には必ず乃木大將のが附きものになつてゐます。尤なことです。乃木大將の御墓が御陵の附近にあつたらと思ひました。左様なら。御機嫌よう。（趣味と修養）

五　乃木大將の舊宅

長府停車場を出ると、すぐ海岸に沿うて古い松林がある。此の松林を離れて次第に町の中央へと歩を進めると、其の昔乃木大將の嚴父十郎翁が、政務上の意見を上陳して藩主の忌諱に觸れ、國元差下を命ぜられて長府へ歸着された當時、一先落着かれたといふ宿屋の小串屋が依然として存し、

長府　山口縣豐浦郡長府町

「定宿」と古風に書いた古行燈が昔を語り顏に其の軒下にかかつて居る。」

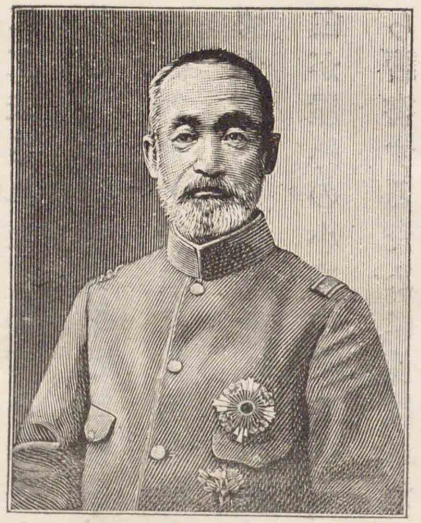
小串屋の西南程遠からぬ處に二宮神社といふ小祠がある。其の隣の横枕といふ小路にはひると、其處に「乃木大將舊邸址」と書いた木標が立つて居る。此の宅地は其の廣さわづかに二百二十餘坪に過ぎぬが、その内にあるものは家屋什器より一木一草の微に至るまで、無限の教訓を我等に與へる。就中我等の注意を惹くものは、邸内の片隅に建てられた、實に見る影もない矮小な家屋である。

此の家屋は長府の有志者によつて組織された乃木大將記念會が特に乃木大將の舊宅を摸造して建築したもので、總

建坪僅に八坪二合、六疊と四疊と二坪の土間とから出來てゐる。而してその六疊の間には大將と父翁と母刀自との三體の木像が安置されてある。此の木像は大將の甥長谷川榮作氏の作で、大將が兩親より教訓を受けて居られる樣を刻したものである。

乃木大將舊宅（恩師乃木院長に據る）

又嚴父十郎翁が舊藩主から拜領された蒔繪の棚を始め、代代乃木家に傳はつた武器即ち二本の槍と薙刀・弓・矢・陣笠・流鏑馬用の綾藺笠・箙・具足櫃・刀掛・簞笥・本箱・机其の他の遺物が此の座敷から次の四疊の間及び屋根裏等に配置されて、其の當時の有りのままの光景を示して居る。



乃木希典

殊に珍しく感ぜられるのは、屋根裏を利用して一種の物置を造り、これに武器その他の器具が巧に置いてあることである。夜具の如きも、大風呂敷に包んで、綱車で上げ

下しする裝置にして屋根裏に吊してある。これは、此の家屋がもと門長家であつて、天井がなかつた爲に、十郎翁の特に工夫されたものであるといふ。

其の他、鍋・釜・竈等を始め、挽臼・敷盥及び母刀自が內職の鹽煎餅・砧卷等の製造に使用された大きな古木の盆がある。大將が令弟眞人氏を相手に米麥を精げた「たいから」即ち米搗臼が屋外の小庇の下にある。また大將が米麥を精げながら讀書するために使はれたといふ小さな板で作つた本置臺が、踏板の上に置いてある。

此の粗末極る矮屋こそ我が乃木大將の舊宅で、其の當時如何なる大邸宅にも、否如何なる宮殿にも見出すことの出來

砧卷　餡菓子の名

ぬ嚴しさと美はしさとの充ち滿ちた家庭の組織されて居た處なのである。（「恩師乃木院長」に據る）

尾上柴舟
名八八郎
國文學者
歌人
東京女子高等師範學校教授
明治九年生

六　燕

尾上柴舟

都大路のあさがすみ
たなびきわたる青柳の
千本のみどりくゞりつゝ
軒端にきたるつばくらめ。

「初秋風にさそはれて
みそらの雲に消え入りし

去年の鳥よ。とわれを見て、
かたらふごとき姿かな。

はてしもわかぬ大海の
波の五百重のをちに居て
もとの主人を忘れざる
心をいかにたゝへまし。

花ちりまじるやちまたの
かをれる泥をふくみつゝ
今年も軒に巣をかけて

長谷川二葉亭
名ハ辰之助
文學者
新聞記者
明治四十二年歿
年四十八

はぐくみ立てよ、汝が雛を。

七 ポチ

長谷川二葉亭

ポチは朝起きだ。僕の起きる時分にはもう疾うに朝飯も濟んで、ひとつきり遊んだ所だ。が、僕の聲を聞きつけると、何處に居ても一目散に飛んでくる。

僕が急いで庭へ降りる所をポチは透かさず泥足で飛びつく。細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立てゝ、嬉しさうに面を見上げる、見下す。目と目とぴたりと合ふ。たまらなくなつて僕が横抱きに抱く。「ポチは抱かれながら身を藻掻いて大暴れに暴れ、僕の手を舐め、胸を舐め、顎を

舐め、頰を舐め、舐めてもく〳〵舐め足らないで、悪くすると口まで舐める。父が面をしかめて汚い〳〵と云ふ。なるほど考へて見れば汚いやうではあるけれども、しかし僕は嬉しい、止められない。

これが濟むと、ポチもやつと氣が濟んだといふ形で、また庭先をうろ〳〵しだして緣の下などを覗いて見る。と、其處に草鞋蟲の一杯たかつた古草履の片足か何ぞがある。好い物を見附けたと言ひさうな面をして、それをくはへ出して來て首を一つ掉ると、草履は横飛びにぽんと飛ぶ。透かさず追つかけて行つて、又くはへてぽんとはふる。そんなたわいもない事をして活潑に元氣よく遊ぶ。

其の隙に僕は面を洗ふ、飯を食ふ。それが濟むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此の時が一日中で一番僕の苦痛な時だ。ポチが跡を追ふ。うつかり出ようものなら何處迄も何處迄もついて來て、逐つたつてどうしたつて歸らない。こつそり出ようとしても、出掛ける時刻をちやんと知つて居て、其の時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つて居る。仕方がないから、しまひには取つつかまへて、否應なしに格子戸の内へ入れて置いては出るやうにして居たが、さうすると、前足で格子を引搔いて、悲しい〳〵、血を吐きさうな啼聲を立てゝ跡を慕ふ。姿が見えなくなつても啼きやまない。僕もそれは同じ思だ。泣き出しさう

な面をして、ぱた〳〵と駈出し、聲の聞えない處まで來て、漸くほつとしてなみの歩調になる、そしていつも心の中でくりかへし〳〵こんな事を思ふ。

「僕が居ないと淋しいもんだから、それであんなに跡を追ふんだ、可哀さうだなあ。僕あ學校なんぞへ行きたくは無いんだけれど……行かないと阿父さんがポチを棄てて了ふつて言ふもんだから、それでしやうがないから行くんだけれども……」

じやん〳〵と放課の鐘が鳴る。今まで靜かだつた校舍内が俄に騷がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後してあわたゞしくぱつ〳〵と開く。と、その狹い口から眞黑な塊

がどつと廊下へ吐きだされ、崩れてばら〳〵の子供になり、我勝ちに玄關脇の昇降口を目がけて駈出しながら、口々に何だかわめく。只もう校舍をゆすつてわあといふ聲の中に、無數の圓い顏が默つて大きな口をあいて躍つて居るやうで、何をわめいて居るのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又ごた〳〵と入りみだれ重なり合つて、腋の下から才槌頭がひよつと出たり、反齒へ肱がぶつかつたり、靴の踵が生憎と霜燒の足を蹈んだりして、上を下へとこね返した揚句にわつと門外へ押出して東西へちりぢりになる。仲好し二人肩へ手を掛合つて行く前に、辨當箱をぽんと拋り上げてはちよいと受けて行くいたづらも

のがある。其の隣は往來の石ころを蹴飛ばし〳〵行く。誰だか「あとで遊びに行くよ」とわめく。「蝗を取りに行かないか」といふ聲もする。友達は皆道草を喰つて居る中を、僕一人は駈拔けるやうにして、脇見もせずに、せつせと歸つて來る。

家の横町の角まで來て、くすぐつたいやうな心持になつて、そつと其の方角の方を見る。果してポチが門前へ迎へに出て居る。僕を見附けるや逸散に飛んで來て飛付く、舐める。何だか「兄さん」と言はれたやうな氣がする。若し本包に辨當箱に草履袋で兩手が塞がつてゐなかつたら、僕は此の時ポチを捉まへて、どうしたか分らないが、それが有るば

かりに、どうする事も出來ない。據なく頭を撫でてやるだけで、不承々々また歩き出す。と、ポチも忽ち身を曲らせて、横飛にひよいと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて僕の面を看ておどけた眼色をする。追付くと、又逃げて又其の眼色をする。かうしてふざけながら一緒に歸る。

玄關から大きな聲で「只今」といひながら、内へ駈込んでいきなり本包を其處に抛り出し、慌てゝ辨當をあけて、今日のおかずの殘りと稱して、實はたべたかつたのを我慢して半分殘して來たのをポチにやる。それも足らないで、おやつにお煎を三枚貰つたのをせびつて五枚にして貰つて、それから庭で一しきりポチと遊ぶと、母がきつとおさらひをおしと

云ふ。おさらひは厭だけれども、これをしないと、すぐポチを棄てると言はれるのが辛いので、澁々内へ入つて形の如く本を取出し、少しばかりおんによごにによごとやる。それでおしまひだ。「餘り早いね」と母がいふのを、空耳潰して、つと外へ出て、「ポチ來い、ポチ來い。」と呼びながら近くの原へ一緒に遊びに行く。

これが僕の日課で、ポチでなければ夜も日も明けないのであつた。（平凡）

六月
大正十年

八　東宮の佛國御巡覽　その一

六月二十三日皇太子殿下には御供の人々を隨へて早朝アルサスに向けて巴里の御旅館を御出發になりました。

アルサスはもと佛國の領内であつたのですが、今より五十年ほどまへ普佛戰爭で佛國が負けた結果、ローレンと共に普魯西へ割讓したのでした。アルサス・ローレンの兒童は其の日かぎり廢される佛蘭西語の讀本をひしと抱いて離さうともしなかつたのを獨逸の役人は片つぱしから奪ひ取つて悉く火の中へ投入れた。兒童はあつけにとられて、泣出す力もなく、ぼんやりと自分の讀本がふす〳〵とくすぶつて、やがて火になつて、めら〳〵と燒けおちるのを見つめて居たが、今まで山のやうに積みあげられた讀本がすつかり燒けてしまつて、跡にはたゞ冷たい灰がちよんぼりと

殘つて居るのを見て、始めてわつと聲を立てゝ泣いたといふことである。

其の子供らがもう六十前後、白髮の老人になつたらうといふ千九百十八年十一月十九日、世界の大戰が休戰になつて、佛軍が思出の深いメッツの城市に入つた時は、五十年一日の如く待ちに待ちこがれて居たアルサス・ローレンの人民は心の奥からこみあげる歡に胸を躍らせて佛蘭西共和國萬歳、ペタン元帥萬歳を絶叫しつゝ、手に〳〵手巾を振り、帽を振り、佛蘭西國旗を打振りつゝ歡迎する。その中を抑へても抑へきれない强烈な歡に勇ましい面を輝かしながら、佛國の國歌マルセユーズを奏する軍樂隊を先頭に凱旋軍のペタン元帥が陸軍大將の正裝に青色の外套を一着なし、白馬に跨つて雄姿颯爽として入城した光景は聞くも血の涌く痛快の極みである。」五十年の間なつかしい佛蘭西語を學ぶ自由をさへ奪はれて居た人民は、今こそ天下はれて大聲に佛蘭西語で萬歳が唱へられたのでありました。そのペタン將軍がこの度は我が皇太子殿下のために戰迹の御案内役を承つたのであります。

列車は獨逸語で書いた町の名札や看板の今に殘つて居る小さな驛を通つたり、百姓の鋤を執つて居る田舍の村を過ぎたりして、十時頃にストラスブルグに到着しました。巴里の賑かな町にくらべて一段と眼についたのは、寂しいこ

の町が隅から隅まで三色旗で飾られ、近處の村々から集つて來た老若男女が道々に人垣を作つて居ることでありました。

午後は日佛兩國の國旗で飾つた小蒸氣船に召されて、有名なライン河の上流をお下りになりました。滴らんばかりのポプラの綠が兩岸から河を挾んで居ります。左岸の綠は喜ぶが如く、右岸の綠は悲しむやうに眺められたことでありませう。

一時間ほど立つて、船がガンシャムといふひなびた一寒村にとまりますと、白服を着けた村の少女が二人、殿下の御前に出まして、紅白の薔薇で作つた花環を捧げました。この

時ペタン將軍の目に涙が宿つて居たやうでありました。それから村の子供の群の唱歌に迎へられて村役場の歡迎會に成らせられましたが、むさくろしい老人たちにまで一々御會釋を賜はりました。その夜殿下がストラスブルグからメッツに御着き遊ばしたのは十時少し過ぎでありました。

村の少女花環を捧ぐ

翌二十四日殿下は佛國陸軍の請に應じてメッツ駐屯軍を御檢閲遊ばしてから、すぐ演習を御覽になりました。

この演習といふのは、今より三年前、千九百十八年に歐洲大戰で獨逸の軍隊が總崩れになつて退却する時の決勝戰をそのまゝ御覽に入れるのでありました。それは一時退却を中止して、二線を引いて應戰して來る敵に對して、裝甲車十臺、歩兵一千人を以て佛軍が猛然として進擊し遂に之を擊破する處であります。陸軍卿バルツー氏とペタン元帥とが共に御説明申上げました。殿下は殊に怪物の如き裝甲車が砂塵を蹴立てゝ進む有樣に御目を留められたやうに見受けられました。

敵の第一線を破つたころに、一匹の野兎が耳を立て脚を揃へて叢から跳び出しましたが、あちこちと逃げ惑つて居りましたのは、時にとつての餘興といふべきでありました。

九　東宮の佛國御巡覽　その二

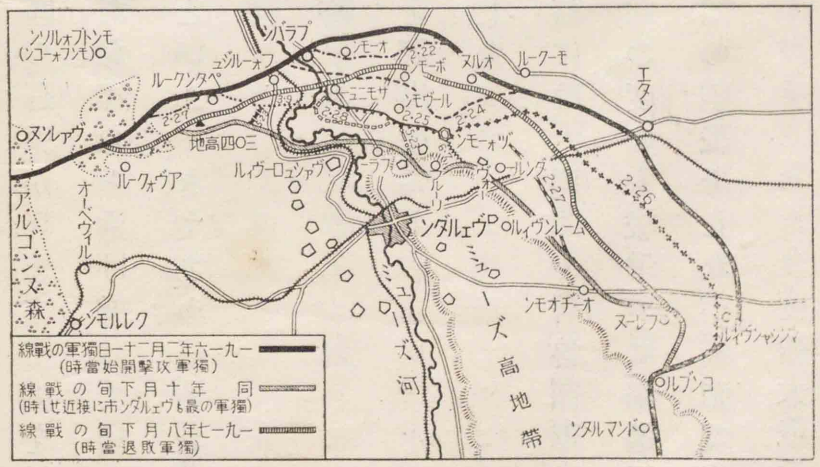
二十五日早朝、殿下にはメッツを御出發、いよ〳〵ヴェルダン戰爭の跡を御訪ひになりました。

ヴェルダン要塞は、普佛戰爭の時には六週間で普魯西軍に落されてしまつたのでしたが、此の度の大戰爭では、獨逸軍が一箇年の間之を攻擊し、十數回の劇戰をしたが、到頭攻落すことが出來ず退却をしてしまひました。今度の大戰爭

の中でも最も壯烈凄慘を極めた處であります。

御案内役のベタン將軍はこの戰場での花形でありましたので、流石に得意の色がその輝く顏に漂つて居ました。

此の日氣溫八十八度、連日の好天氣に道路の乾き切つて居る中を九臺の自動車を列ねて、まづ十萬の佛國將卒を理葬した墓地に成らせられ、殿下には巴



ヴェルダンの要塞戰圖

ヴェルダン陸軍墓地御參拜

里の凱旋門に捧げられたと同じ花環を捧げられ、特に鄭重な日本式の敬禮を遊ばしました。

それからミューズ右岸のヴォー砲臺を御訪ひになりました。ヴォー砲臺は佛獨兩軍で取りつ取られつ幾回となく激しい爭奪戰をくりかへした處で、遂には同じ地下室の中で上

部は獨軍之を占領し下部は佛軍が立てこもるといふほど極度に接近し、多數の犧牲を出したのでありました。その邊一帶は到る處兩軍劇戰の跡を語らぬはなく、見渡すかぎり野菊や虞美人草や瞿麥が亂れ咲いては居ますが、その一つ一つの葉にも花にも過ぎし日の血なまぐさい匂がしみ込んでゐるやうでありました。その中を殿下は一行と共に拾ひ遺しの不發彈や、野ざらしの白骨に注意せられつゝ御進みになつて砲臺に御着きになりました。

折しも遙の麓に當つて轟々たる爆聲が起りました。聞けば今なほあちらこちらに埋まつてゐる大砲の彈丸を掘起しては爆發させてゐるのださうでありました。

やがて殿下は蠟燭をおつけになつて砲臺内の地下室に御入り遊ばされましたが、その洞窟の陰慘なることには當時の有樣を眼の前にありゝと思ひ浮べられたのでありました。この中でもペタン將軍はくはしく戰爭當時の實況を御聞に達しました。

それから殿下はヴェルダン市街に成らせられて、屋根を打貫かれた博物館や見る影もなくなつた寺院などを御訪ひになつた上、大戰當時の英佛軍司令部を御訪ひになり、ペタン將軍の起居して居た室にも成らせられて、將軍の勞苦をしみ〴〵と御犒ひ遊ばしました。

午後は方面を轉じてミューズ河左岸の三百四高地を御視

察になりました。こゝは四ケ月に亙つて佛獨兩軍が最も激烈な戰鬪をくりかへした處で、こゝだけで佛軍が四十萬の兵を喪つたとのこと。附近の村落は今なほポンペイの廢墟より甚だしい慘狀を呈して居ります。

殿下は無心の雲雀が中空に高く飛んで朗かに囀つて居る聲を耳にしつゝ假小屋の納骨堂に成らせられ、ペタン將軍發起の記念弔魂堂建設費に御手許から御寄附をなさいました。それから淋しく花の咲亂れて居る廣野を横ぎつて、當時獨逸皇太子の展望臺として用ひられたモントフォルソンの天文臺をお訪ひになりましたが、その邊の家はすつかり荒れ果てゝ、人が住めさうにも思はれず、わづか一軒住

み殘つて居るあばらやの主人は慘ましいほど落ちぶれて、戰迹で拾つて來た砲丸や帽子や、さては繪葉書などを旅人に賣つて漸くその日をくらして居るとのことでありました。

其の夜巴里へお歸りになつて、例の如く親ら日記を御記し遊ばしたが、當日は御母后陛下の御降誕日であり、淳宮殿下の御誕辰に相當するので、遙に内地の事をも思ひ浮べさせられたやうに見受けられました。

其の後ソンム・ランス等の戰迹を隈なく御巡視遊ばした後、七月七日ひさしく御滯在の佛國に名殘を惜ませられつゝ伊太利へ向けて御出發になりました。そのとき、殿下は佛

國の新聞を通して、告別の辭として佛國人の勇氣と努力とを稱揚せられた後、「余が最も深い印象を受けたのはランス・ヴェルダン等の荒れ果てた戰場の有樣である。戰爭を讃美するものは此の有樣をまのあたり見て、如何に思ふであらうか。」と仰せられました。

ランス　白耳義ニ近イ佛國ノ小都會

一〇　壯烈なる二勇士

千九百十四年十一月二十六日から二十七日の朝にかけて、今までランス附近に陣を布いてゐた獨逸重砲兵の一隊は何處へか其の姿を隱してしまつた。佛軍は盛に飛行機を縱つてみたが、容易に發見することが出來なかつた。いろいろと研究した末、小さな丘の上にある農家に偵察兵を派して敵軍を搜索しようと決したが、此の任務に就くものは萬死の覺悟をしなければならなかつた。遂に幾人か志願して出た決死の兵卒の中から二名の曹長を選拔して派遣することゝなつた。

二人の曹長は林間を這ひ、或は敵彈に身を曝して、千辛萬苦の末、遂に目的の農家に忍び込むことが出來た。それから數分時の後、曹長は電話にかゝつた。

「もし〳〵、……え、電線を無事に引きこみました。はい、二人は今納屋の中に潛んでゐます。獨兵は目前に居るのであります。此の農家の北、千五百米、地圖上に示してあ

る小林を目標に照準して下さい。」

味方の巨砲は轟然と鳴り轟いた。

「隊長殿、前面に落下。照準は猶百米前方。少し右方に過ぎる。左方照準。然り、其の邊。命中。命中。的確です。」

殷々轟々、我が軍の打出す砲彈に敵兵は算を亂して仆れた。

「もし〳〵、敵は非常に混亂してゐます。はい、私共は納屋の中に隠れてゐるので、至極安全です。此の家の納屋の明り窓は敵軍の方に開いてゐますから、偵察には非常に便利であります。」

十分許の間に我が軍は敵の砲兵を殆ど擊碎してしまつた。すると不意にけたゝましく電話がかゝつて來た。

「隊長殿、砲擊中止。敵は林から退却を開始し、今我が農家の方向に向つて移動してゐます。え、農家—私共がゐる此の家の方へでありますか。撤退—撤退せよとおつしやるのでありますか。併し、若し私共が退却してしまつたら、今後の報告はどうしませう。はい—いや今暫く止つて形勢を見たいと思ひます。納屋の中にゐますから、敵兵に發見される事はありませぬ。敵は今此處から三十米の處に砲列を布いてゐます。え、出發、—撤退するんですか。あゝ、もう遲くあります。獨兵は庭の中へ入つて來ました。なに構ひませぬ。敵は全部用意を整へて陣を布きました。隊長殿。今であります。砲擊開始。目

標は此の農家。―いえ、私共の居るこの農家を狙つて砲撃して下さい。一分の猶豫もなりませぬ。早く。目標は農家であります。」

嗚呼勇敢な兵士。隊長の身として、かやうな忠勇な部下をどうして己の砲彈で殺すに忍びられよう。しかし、二人の兵士は殺しても、國家は救はねばならぬ。「好し。二人の讐は打つてやる。」とばかりに、號令一下。戰友の死を弔ふ涙は砲彈の雨。忽ち農家の礎も、敵軍の砲車も、打出す佛軍の彈丸に碎け散つて、さしもの敵を見事に全滅させてしまつた。

嗚呼勇敢な兵士。其の農家も、其の兵士も、已に影をも止めない。電話の聲は今なほ戰友の耳に殘つてゐるけれども

一一 捕鯨記

（時局に關する教育資料）

船

捕鯨船ニコライ丸

鬱陵島 朝鮮ノ東八十浬ニアル小島 隱岐ノ北々西百四十浬

船は全速力を以て進航し、鬱陵島より南西二十四五浬といふ處に達した。忽ち叫ぶ檣樓の船長。「鯨群々々」。時に午後零時四十分。

果して、前面一浬程の處に鯨艦隊の大運動を見出した。船員の顔は見る間に輝いた。どれから取つてよいか、さすがに迷ふであらう。と見れば、砲手は平然として居る。

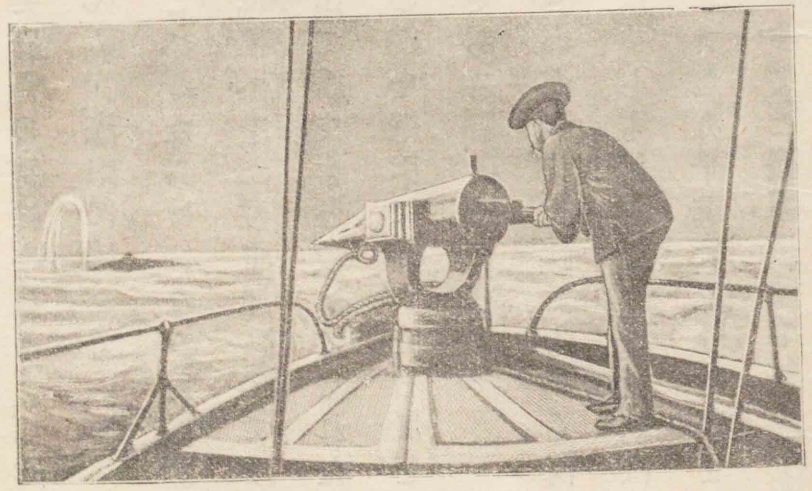
一時四十五分となつた。多くの中で一番運の惡いのが、舳の前面十二三間少し左寄にぽつかり浮いて、極めて暢氣に

潮を噴きあげた。轟然一發。白煙。白波。海底に第二の爆發。これは鯨の體に突入つた銛さきの破裂した響ださうな。船長は大聲に「オール、ライト」。船員は齊しく叫んだ「オール、ライト」「オール、ライト」。砲手は此の一發の命中に於て、多大の名譽を荷へるにも關らず、顏面に些の表情を示さず、例の如く悠然として砲の傍に立つて居る。

余はいつの間にか唯一人船橋の上に殘された。水夫長も水夫も皆下に降りて了つたのである。「萬歲々々」と余は絕叫したが、誰も應じない。下ではそれどころではないのであつた。

余　本文ノ作者江見水蔭

ウィンチの回轉は風車の如くである。銛綱は水の迸る如くに繰出されて居る。摩擦の爲に熱する車輪へ水を掛ける。機械の要所々々へ油をさす。船庫に跳びおりて繰出された綱の捌をつける。檣から吊りさげた滑車から、綱鐵索を下す準備をする。更に又第三の銛を仕込むべく迅速に支度をする。



捕鯨船

これが皆同時である。が、さて肝腎の鯨はと見ると、何處にも見えぬ。しかし銛綱はぐん〳〵海中に沈んでいく。何だか甚だ心細くなつた。そこへ汗だらけになつた機關長が登つて來て、「御覽なさい、今は『後へ』をかけて居るのです。それに『徐行』位の速力で船は出て居ます。」と敎へてくれた。百二十噸の汽船は今や一頭の鯨を綱引に傭つて、石炭を焚かずに海洋を走つて居るのである。

二時頃、遙に遠く手負鯨は浮きあがつて、それでも高く海水を噴きあげた。船を引く力は少しも鈍らぬ。「今、銛綱は二百七十尋ばかり出て居ます。まだ九十尋は餘つて居ます。なにそのうちにはもう弱りますよ。」と機關長は平氣。「すると、もうこれで一段落ですか。」と余は問うた。「や、どうしてどうして。これからが大活動です。」と云ひすてゝ馳せくだつた。

此の時、事新しく驚かれたのは、海原の廣大なることである。巨鯨は紙鳶の如く小さく、銛綱は凧絲の如く細く見えるのである。

二時十分、今まで鯨に引かれて居た船は、愈〻反對に鯨を引寄せる段となつた。引きはじめられてからは、鯨の浮き沈みが急激になつて、二分時、三分時毎に海水を吐くのである。それが近寄るに從つて益〻繁く、後には潮と共に傷口から血を噴くのさへよく見える。銛の打込まれて居る處は、人間

ならば腰といふ邊である。背部の疣の左方である。其處から五六尺も高く血を噴きあげながら、まだ死に切らぬ鯨の喘ぎ。物がかう偉大になると、悲慘といふ念は起りにくい。これをも壯觀の內に數へたくなる。

とゞめの銛を擊ちこむ時は來た。二時四十五分に又彼の砲で擊つた。が、當らなかつた。三時十分の頃には血だらけの海波がそろ〳〵荒立つて來た。風が出たのである。三時二十分再びとゞめの銛を擊つた。今度は當つたけれども、鯨はまだ死なぬ。そこで愈、捕鯨事業中の大冒險たる端艇突擊の令は下された。

左舷に吊つてある二間足らずの小端艇は忽ちにして下され

た。この勇敢なる乘組はと見ると、二水夫と船長である。船長は手に槍の如く見える四間餘の突銛を持つて、端艇の艫に突つ立つて居るのである。蔚山の急を聞いてこれに走るべく、船頭に槍を杖づいて立上つた鬼將軍の雄姿、それを洋式で見せて居るのである。余は帽を無闇に振つて、「萬歲」を絕叫した。

勇敢なる端艇は見る〳〵海中の噴火山に突進した。血煙は日光に反射して火山の焰に異ならぬのである。忽ちにして端艇は鎔岩流とも見るべき巨鯨の胴中に乘揚げて、船體は一本立となり、人は皆逆樣になつた。見る者は、皆冷汗をかいたのである。「あつ〳〵」と云ふ聲がそこにもこゝに

も響きわたつた。

沈着なる砲手までが、此の時ばかりは救命浮標に手を掛けようとした。實に此の端艇突擊位危險な事業はないのであつて、若し鯨の尾羽か手平かに觸れようものなら、それが最期、船體は粉碎されて了ふのである。乘組は無論跳ねとばされて、助つた處で一生のかたは。

唯見る、艫の船長、力と賴む一本の突銛を扱いて、鯨の心臟部目懸けて突つ込んだ。是と同時に鯨の體は海中に沈み入つて、絶大なる血の渦卷。端艇は山頂から谷底へ落下したやうに吸込まれた。

二水夫は必死となつて櫂を動かしたが、船長はまだ突銛を

放さぬ。筏師が竿を泥川に突つ立てたやうな形で、一所懸命に力を入れて居る間に、急にそれを引拔くや否や、それつとばかり五六間後退を命じた。退くか退かぬ間に、鯨は礁脈の如く又浮きあがつた。それと見るや、奮然端艇を再び乘揚げて突く。沈む。退く。浮く。突く。四回ばかり繰返された間に、六尺餘の銛の穗先(柄の部は三間位)は弓の樣に曲つて了つたのである。

豫て用意の鐵槌で、退いては打直し、打直しては又突く。此の間の惡戰苦鬪、實際の戰爭にも是程の事は稀であらう。

其の間に、船長は「えつ、面倒なり」と思つたか、曲つた穗先を舷側に打附けて、反を返し、今しも浮きあがつた鯨の手平の上

を深く突刺したので、さしもの大動物も全く絶命。兩方の手平を高く立てゝ、雪の如き眞白い腹を出して、碧海に一文字。「萬歳」は始めて船員の口に唱へられた。時に午後三時四十一分。發砲してから此の最期まで、實に一時間と五十六分を費したのである。

それからその鯨をウィンチで引寄せて、右舷側に鐵鎖で結び附けた。大方船の八九分はあつた。

身長を測つて見ると、六十一尺、胴の周圍の最廣部が二十四尺。長須鯨の雄であるといふことだ。（「捕鯨船」に據る）

一三　伊能忠敬の晩學

幸田露伴

幸田露伴
名ハ成行
文學者
文學博士
慶應三年（一八六七）生

養嗣子
生家ハ上總國武射郡小堤村神保氏
養家ハ下總國香取郡佐原町伊能氏

忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家をその子景敬に讓るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意專心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に、最も美はしく果さん事を期し居たりき。

凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざることには一擧手一投足の勞をも惜み、單に己が欲することにのみ身を委ねんとするは免れがたき習なり。たとひ己が欲せざることなりとも、その爲さゞるべからざることなる以上は、甘んじてわが情を屈しわが氣を抑へてわが爲すべき事をなすは、その人啻に才氣あるのみならず、また實に德量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて德量あ

る人は少し。年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刄の肉薄きが如し、物を截ることはよくすべし、折るゝ恐は免るべからず。されば世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は數へも盡しがたし。忠敬が算數・曆術の學を嗜み、且これをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、「伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし。」といふを唯一の希望として、三

伊能忠敬（佐原町伊能氏藏）

十餘年一日の如く只管その家業に丹誠したるが如きは、實にその德量の大なるを見るべきなり。

かくの如くにして伊能家は興りぬ、景敬は家を嗣ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は是に於て圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時は忠敬年既に五十歲、常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歲の時も前途多望なる青年の春なり、爲すある人には、如何なる場合もわが力を試みるべき所たり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき

時に當つて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。」

さるほどに、忠敬はその鄉里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一樣に笈を負ひて鄉關を出で、都門に遊びて師を尋ね學に就くところの書生と異なるところは、たゞその若きと老いたるとの差のみ。かくして忠敬は身をおのが好める學に委したるが、おのが滿足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから

幕府には曆法改正の擧ありて、これがため特に大阪より高橋作左衞門といふものを召されたり。作左衞門、東岡と號す、算數・曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して直に師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歲にして東岡は三十二歲なりき。普通の人情にては、おのれより

筆蹟

來月初高田迄相
回候樣仕度奉存
候是迄隨身のも
の共無病に而安
心仕候測量御用
向之儀御觸御擧
掛ゆへ（ゑ）何方
にも差支無之誠
以難有仕合に奉
存候追々猶可奉
申上候ゞ惶
九月八日　伊能勘解由
高橋尊師

伊能忠敬筆蹟（流芳遺墨）

年若き人に會ひては、たとひおのれが學業などその人に及ばずとも、猶强ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、德量ある忠敬はいかでか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき、喜びてそれが門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして弟子たる忠敬の老いたるをば屢〻笑柄となしたりといふ。

晩學の難きは、實に何れの世にありてもかゝる事實の存するがためなり。是を以て、非凡の士にあらざれば、大抵自ら恥ぢて師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るに至るなり。(イ)『本來の上よりいへば、老いて學ぶはたま〳〵その志の淺からざるを顯すのみ、また何の

不可かあらん、況やまた何の恥づべきところかあらん。思ふに區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於てはたゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。』かゝれば忠敬と同門學生との優劣勝敗は比較するまでもなく明かなることなり。

忠敬の學術はさながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべきものなきに至れり。

かくて忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその年五十五歳の時なりき。五十五歳といへば人は頽齡用ふるに堪へずとする年齡なり。されど忠敬は氣力旺盛さながら

野々口隆正
國學者
明治四年歿
年八十

壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて喜色滿面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃々として燃ゆるが如き熱心を胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早老の人種なりといふ、是、豈我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。（露伴叢書）

一三　立志

野々口隆正

蒲生君平
名ハ秀實
志士
文化十年（一八一三）
卒
年四十六

平田篤胤
國學者
天保十四年（一八四三）
卒
年六十八

たてそむる志ふかきたのまれは
龍のあきらに珠もかくれて

蒲生君平

遠ちおやの身によりたる緋縅の
面影うかふ末々ぞうみち葉

平田篤胤

なさけあるなさけなくねなさけなるわさをも
あらすとまたる人のはかりあるを

柳澤淇園
名ハ里恭
文人
寶暦八年(一七五八)
歿
年五十六

一四　堪忍

柳澤淇園

或人、文盲なる者を意見して「世の交は他の事はいらず、唯堪忍の二字をよく守るべし」といふ。文盲の人首を傾け「かんにんとは四字にて侍らずや」と指にて數へ「御許には思し違へなるべし。かんにんの四字にて侍り」といふ。意見せる人、「愚昧の人かな。堪忍とは、たへしのぶと書きて二字なり」といへば、また首を傾け「たへしのぶならば、又一字ふえたり。五字となりぬべし。何と仰ありとも、我等は四字と思ひ侍れば、四字にてかんにんは致し侍るなり」といふ。かの意見せる人またいふ「汝が如き愚昧の者は實に諭し難し。人に

田山花袋
名ハ錄彌
文學者
明治四年生

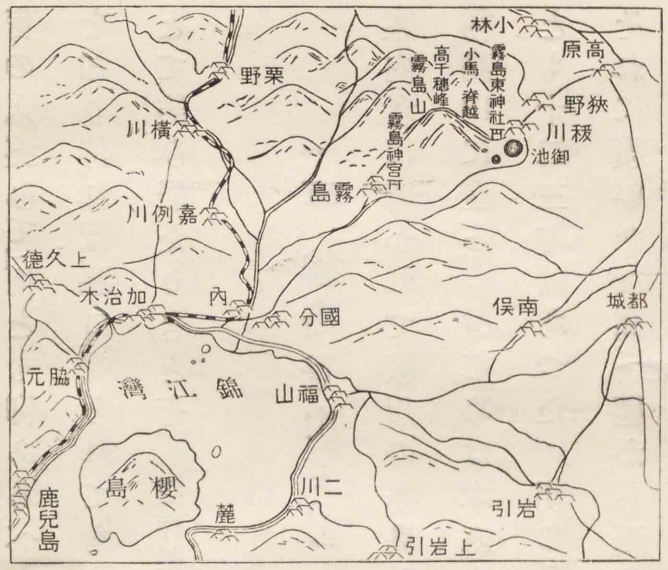
似て蟲同様なり。己が儘にすべし」と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて「何とも仰あるべし。我等はかんにんの四字を知り侍れば、惡口せられても少しも腹立ち侍らざるなり」とて笑ひ居たりきとぞ。（雲萍雜志）

一五　霧島登山 その一

田山花袋

案内者に導かれて祓川の霧島神社に參詣し、さていよ〳〵霧島山に登る。はじめは木立の中を行つた。これが少くとも十二三町はあつた。朝の露の乾かない草原がやがてそれに續いた。高千穗から渦卷き上る白い雲が、もく〳〵と朝日を掠めては霽れ、掠めては霽れしてゐた。私達はや

がてその草原を通つて森林帶を目の下に見るやうなところに來た。それにしても何といふ好い眺望だらう。昨日とほつて來た路は一目に見える。高原の町などはすぐ眼の下に見える。狹野の杉の並木が朝日を帶びて光つてゐる。右には御池・小池などいふ池の



霧島山附近圖

靜かに湛ひてゐるのが見えた。

しかし、それも短い間であつた。嶮しい馬の背越がやがて私達の前にやつて來た。私達の行く路は、馬の背のやうなところを通つて行かなければならなかつた。下を見ると千仞の谷である。一度足を踏みはづせば、もうそれきりである。私達は木の根に縋つて、這ふやうにして登つて行つた。

難所は愈〻私達の前に迫つて來た。四邊の景色などはもう見てゐられなかつた。私は唯案内者の跡について登つた。ふと案内者は立止つた。前には絶壁が聳えて、そして路が其處で絶えて居る。私達はその絶壁を登つて行かなければならないといふはめに陷つた。足だまりになつて居る

處は三尺四方位で、下はすぐ屹立した絶壁になつてゐる。案内者はまづ自分の帶を解いて、それを絶壁の上にある木の根に引つかけ、そして其の帶をたよりに岩角に足を踏みかけて、登つて行つた。私もその帶に縋つて登つた。私はこれまで隨分高い山に登つた。登つた高山の數も十や十五はある。しかし、此の時ほど恐ろしいと思つたことはなかつた。木の根が折れゝばそれで萬事休すといふことになるのであるから。

それから三十分ほどして私達は天の逆鉾の立つてゐるところに行つた。それが高千穗峰の絶頂であつた。天の逆鉾は石ころの澤山置いてある中に劍のやうになつて立つて居た。天狗の面のやうなものがそれに刻りつけてあつた。動かして見るとぐら〳〵と動いた。「これを拔いてこつそり持つて行つたら面白からう。」などと言つて私は笑つた。南谿も「天の逆鉾はさう古いものではない。」と云つてゐるが、實際これは大したものではないと私も思つた。無論古代からのものでないのは一目でわかる。神主か何かゞそこに持つて

南谿
東西遊記ノ著者
橘南谿
伊勢ノ醫師
學者
文化二年(一八〇五)
歿

天の逆鉾

來てさして行つたものゝやうにすら思はれた。

そこから見た眺望は非常によかつた。しかし生憎に南と東の方に雲がかゝつてゐて、此處から見ると何とも云はれないといふ錦江灣の景色が見えなかつたのは殘念であつた。私達は其處で握飯を食つた。時計は十一時四十分の處を指してゐた。

一六　霧島登山 その二

田山花袋

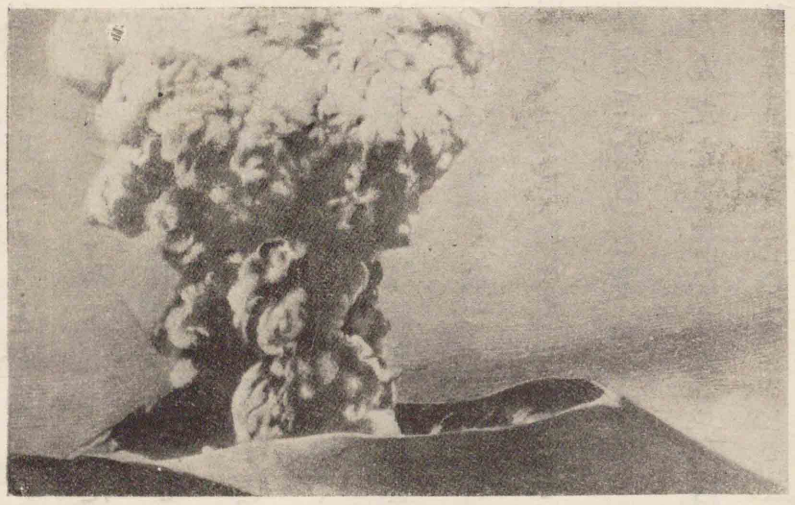
私達はのんきに話したり何かしてゐた。十分後に恐ろしい災害が頭の上に來ようなどとは何で思ふものか。

ふと見ると霧が烈しい力で押しよせて來てゐる。見る見る四邊が一面の霧となつて行つた。案内者のおりて行く方について行つたが、段々霧が深くなるにつれて、三尺先も分らなくなつてしまつた。下では凄じい噴火の音がしてゐる。ごう〳〵。何のことはない、大風の吹くやうな音だ。

少しおりると、路は消えて、石ばかりごろ〳〵してゐる。「此處ぢやなかつたか知らん」。かう案内者が惑ひ始めると、力にして居た案内者の信用がすつかり無くなつてしまつて、心配でたまらなくなつて來た。霧深い霧がなければ何の事は無いのだけれど、その三尺先も見えないやうな厚い灰色の壁に似た霧とすさまじい噴火の音とが私の心を際限

なく脅した。「間違つて居ては大變だ。路が無いぢやないか。」と私は何遍も案内者に云つた。

後には案内者の顔も蒼ざめて見えた。「後生のわるい人。かういふ迷信もいくらかは手傳つてゐるらしく見えた。「仕方がねえ、もう一度逆鉾さまの處まで上つて見よう。」かう云つて、五六町おりた處を又上まで登つて見た。しかし本當の道は矢張發見されなかつた。私達は深い霧と凄じい音との中に少くとも二時間はまご〳〵して居た。幸にも霧が少し晴れかゝつて、お鉢の中から渦卷上る噴煙と霧との區別が微かながらもわかつて來るやうになつた。案内者は喜び勇んだ。



霧島山噴火口

霧の中から噴火口がそれと見え出して來た。私達は噴火口の西の隅の方のところに立つてゐたのである。東へ行くべきのを西へ來てゐたのである。これを眞直に下れば、いやでも噴火口の中に落ちてしまはなければならないやうな危い位置に私達は立つてゐたのである。

私達は東へ〳〵と行つた。三十分ほどして私達は漸く細い道のついてゐる處へ出た。霧がなければ何の事もない路を、私達は途中で間違つて右に行つたのだといふことがやがて分つて來た。「危いところだつた。」案内者がかう言つたのは、もはやお鉢をめぐつて、下におりようとする頃であつた。私達は始めて胸を撫でおろした。霧は下るに從つて段々薄くなつて來た。南谿も霧の深いことを書いて居る。「少しおりると晴天で、待つてゐる從者が下に小さく見えてゐる。」と書いて居る。矢張南谿もかういふ目にあつたんだなと思ひながら、私は急いでおりて行つた。私達は下りに下つた。霧はすつかり霽れた。ふと前を見た私は、思はず聲をあげた。錦江灣が一目に、唯一目に、何の事はない、丁度パノラマのやうに。

この見晴しの好い坂道を一里半ばかり下ると、路はまた深い森林帶に入つて行つた。霧島の本社は此の薄暗い森林帶にあつた。朱塗の堂宇がじめ〳〵する空氣の中に淋しさうに見えてゐた。境内はしんとしてゐた。人の影も見えなかつた。

十五分後には、私は神社の下の處にある旅館に身を横たへてゐた。案内賃を少し增してやると、案内者は繰返し〳〵禮を言つて去つた。旅館の欄干に凭ると、錦江灣が唯一目に見わたされる。櫻島の上からは薄い煙が立つてゐる。

私は長い間、その美しい眺望に見入つた。（日本一周）

一七　田園の夏

杉村廣太郎

杉村廣太郎
號ハ楚人冠
新聞記者
明治五年生

家を大森の片ほとりに移してより茲に一年、四季ごとにかはり行く鄙の趣、中にも夏ばかりめでたきはなし。

大森
東京府荏原郡大森町

朝はまだきに起き出づ。風涼しく氣清ければ、自轉車に打乘りて大井・鈴が森の邊を走る。行人稀にして舞ひのぼる塵もなし。曉風身に沁みて夏の半ばなるを覺えず。日麗かなる時は露けき野草ふみしだきて、行きて潮を八幡の濱に浴ぶ。朝は水澄めれば、底の眞砂も數へつべし。鏡の如き海づら、彼方此方泳ぎまはりて汀に歸れば、水樓、人晏くして、雨戸繰る音始めて聞ゆ。

大井
東京府荏原郡大井町

鈴ヶ森
大井町ノ大字

八幡の濱
東京府荏原郡入新井村ノ地名

歸りて朝餐したゝむるに、必ずしも膳羞を須ひず。紫深き茄子の淺漬に、番茶の煮ばな香いと高し。食卓を圍むもの、母と妻と二兒と伊豆より來れる少婢と、これに某生とわれとを加へて合せて七人なり。某生は夏季休業中來りて我が家に宿れるなり。

時餘りあれば、更に冷水に浴し、さては素跣足にて裏の瓜畑に水を注ぐ。さるべき暇なき時は白麻の衣輕く着なして直に東京に向ふ。八時十三分の汽車を待合する人々大森停車場のプラットフォームに賑はし。知る、知らぬ、互に目禮して昨夜は暑かりしなど語り合ふ。流石に都離れたる

様をかし。

晝少し過ぎて家に歸る。さと水を浴びて後、午餐の膳に就く。清風徐に來るところ、庭の欅の影濃かなるところ、遙に沖なる白帆のゆきかふを眺めて、いつとはなく夢に入る。覺めて後、日猶高ければ某生を促して海に入り、或は潮を浴び、或は貝を拾ふ。さては射的場の裏なる松林に入り、蟬聲雨の如きを聞きつゝ休らふ。

偶〻都より友の訪ひ來るあれば、舟を傭うて灣内を漕ぎ、疲れて、握飯を頰ばり、澁茶に喉をうるほす、その快如何ばかりぞや。歸りて拾へる貝の汁をとゝのへてもてなす。旨しとも旨し。朝のうちに來べき八百屋の來ぬ折は、裏の手作りの芋を煮て客に饗すべし。

家の裏に十歩の空地あり。夏至る毎に、自然薯の蔓生ひて櫻の枝にわたり、楓の幹にかゝる。天僅に曇りて暑さやゝ輕き時は、某生と共に赤裸々となりて之を掘る。掘り〳〵て手も屈きかぬるに至れば、大地に横たはりて、半ば頭を穴に埋めて掘り進む。二尺ばかりなるもの二つを得れば、以て一家の食膳をみたすべし。乃ち泥まみれのまゝ海に出でて洗ひ來る。歸れば薯汁既に成りて我を待てり。

水を家の内外に撒き、一浴して都の塵と垢と汗とを洗ひたる後、夕餐の膳に就く。朝餐に列なれる人の、一人も缺けず、一日の務を終へて集りたる、嬉しからずとせず。

日暮れなんとするに、風益〻冷しく氣愈〻涼し。東の障子明け放ちたるところより見下せば、青々たる稻田のあなた、暮れ行く鈴ヶ森・八幡の濱の家々を隔てゝ、白帆漸く消え、漁火次第に鮮かなり。幼きものは少婢に伴はれて畔道にさまよひ出でぬ。母と妻とは八雲琴などおぼつかなげにかきならす。われは庭の大樹にハンモック懸けわたして、のけざまに臥しつゝ、緣に出でたる某生と語る。仰ぎ見れば星光愈〻明かに、樹梢をそよぎわたる風殊に涼し。垣を隔てゝ往きかふ村人の取りつくろはぬざれ言、手に取る如く聞ゆ。夜更けぬれば、人聲次第に疎なり。時には神明の杜のあたりを掠めて杜鵑の啼くを聞く。臥床に入りやせまし、入ら

ずやあらましなど打案じつゝ書を讀むに、燈火を慕うて飛來る蟲の數々、一に蛾、二に金龜子、三に蟬、四に蜻蛉、其の外は名をだに知らず。

『月出でたる、またなく嬉し。光きら〳〵と水に映りて、水際の松林を離れゆくさまのをかしきに、竊に門を開きてあこがれ出づれば、同じ思の人のありてや、月下に横笛を吹きすさぶ音など聞ゆ。』（へちまの皮）

一八　涼味

河童

徳富健次郎

十二歳の夏、京都栂尾の寺に避暑したることとあり。寺の下

徳富健次郎
號ハ蘆花
文學者
明治元年生

に一道の清流あり。一處、藍を湛へて淵をなし、淵の上に岩ありて突出でたり。

日盛に二三の友と近くの村に行きて西瓜を買來り、之を溪流にひやすと稱して、或は岩上より抱いて躍り、或は爭ひ奪はんとして、互に水を潑ねて狂ひ廻れば、淵は雪を沸かして三人が眼の眩める間に、水は竊に綠玉塊を奪ひ去つて、浮かせ沈ませ流し行く。

餘りに爭ひて岩角に西瓜を割れば、各〻其の一片を泳ぎながらに食ふ。過半はこれ水なりき、

寺僧我等を小河童連といへり。眞に河の童なりき。

南瓜の蔓

土井晚翠
名ハ林吉
英文學者
詩人
第二高等學校教授
明治四年生

故郷の姉の家に清冷氷の如き井水あり。井戸の側に綠葉翠蔓一面に這ひひろがりて黃花處々に咲きいでたる南瓜あり。午下二點、蟬の聲耳に喧しくして、瞼に千斤の重みある時、跣になりて井戸側に走り行き、一桶の水を汲みて井桁の上に置き、南瓜の蔓の彎曲せるものを取り、桶にさして導水管となし、赤裸々になりて頭を冷したる事ありき。其の心地今に忘れ得ず。（自然と人生）

一九　夏の夜

土井晚翠

はや黃昏の影寄せぬ。
風おもむろに吹通ふ

都大路の夏げしき
洗ひすてたる夕立の
名殘柳に玉とめて。

大空高く月出でて、
八百の街の隈もなく
照す涼しき夏の夜や
雲は靜かに收りて、
殘る稀なる星の影。

そゞろあるきに夜更けて、

袂は重し、露深し、
月斜なる時計臺
二つの針の重なりて
打つも高しや、時の數。

傾きかゝる天の河。
仰ぎて家路さして行く
逍遙の群あともなし。
ちまたのあるじ今はたゞ
月の光と吹く風と。

（曉鐘）

二〇　游泳場より友に

先日は豫て御話あり候富士登山を高根氏と共に御決行なされ候由定めて御愉快なりし事と御察申候當地游泳場は御承知の通り去二十一日開始例年より先生方の御出も多く一同意氣込居候毎日朝二時間ほどは自修黙讀の時習ふて專ら第一学期の復習をつとめ居候うれは休暇中にても惰情に流れぬやうにとの趣意にはあれど游泳は前年

後各一回宛に候當番を天氣都合誠に宜しく今日まで未だ一日も休みし事之なく段々技術の進歩も著く大石兄田井兄の如き泳て技術の進歩も著く大石兄田井兄の如き水心皆無なりき連中も昨日の試驗には見事一里半の遠泳をやつてのけ小生は三里を試み候へども殘念なるかな今一町と申す處にて整を護れの石分に相成候うの次第は是非成功致すつもりに候若分は腕押し膀押致すわり角力の荒業より冷詩演說の稽古に至るまで思ひ思ひに娯樂の限りを盡し候追々當地游泳

の日數も殘り少なに相成候へとも餘暇を利用して昨今近傍の名所古蹟などを探り候て何も土産は之なく候へとも其皮膚の色たけは自慢ふかい位の卒業の色の剥げぬうちに君方の仲間に懸けたく存じ候不具

二一　笑話二則

五體の取外し

或老年の軍人、手も脚も軍陣で無くしたが、頭と胴だけは無難であつたので、義手・義足をつけて尋常に見せてゐた。毎晩臥床に入る前には之を取外して眠るのが例であつた。此の家に新參の下女があつたが、主人の不具であることをまだ少しも知らなかつた。やがて晩になつて、一同寢る時刻が來ると、主人は一本の腕を出して、

「これを拔いてくれ。」

といつた。下女が何心なくぐいと引つぱると、すつぽり拔けた。見ると、木で作つた腕であつた。それから主人は又、

「今度は此の腕だ。」

といつて出す。よもやと思つて引張ると、又拔けた。つゞいて、

「今度は右の脚。」「今度は左の脚。」

と、一つ〳〵拔かせるので、下女は、主人のからだが何處もかも木で出來てゐるのかと思ふと、何とも怖ろしくなつて、がたがた慄へ出した。主人は下女のこはがるのを見て、も一つ威してやらうと、とんだ洒落氣を出し、まじめな顔をして頭をさしのべ、

「一番しまひに頭を拔くのだ。」

といふと、下女はきやつといつて逃げ出した。

寐とぼけ

坊主と百姓と床屋とが旅で落合つた。日が暮れてから三人づれで宿屋にはひつたが、やがて寢る時分になつて、床屋

「お二人に御相談ですが、此の宿は少し不安心のやうに思はれます。夜中に荷物などを盜まれぬやうにしたいものです。」

といふと、坊主

「何樣、私も心もとなく思はぬではない。しかし、どうしたがよいであらう。三人ともくたびれてゐることだから、夜中こゝにすわつてばかりもゐられまい。」

と答へた。そこで床屋のいふには、

「いや、いゝ工夫があります。三人の中一人づつ代り〳〵に起きて番をして、外の二人は寢ることにいたしませう。そしてその順序は闘をひいて、一二三をきめようではありませんか。」

坊主も百姓も之に同意して、早速闘をひいたところが、床屋が一番、百姓が二番、坊主が三番に當つた。そこで床屋はすぐに不寢番の役を勤め、あとの二人は眠に就いた。床屋はつれ〴〵の餘り、そつと荷物の中から剃刀その外の道具を出し、たあいもなく寐てゐる百姓の頭髪を濕して、一筋も殘さず剃落した。そのうちに番の明ける時刻が來たので、百姓を搖り起して、

「今からおまへさんの番だ」。

と言つた。

百姓は起きは起きたけれど、目はまだ覺めきらず、やがてふと頭に手をやつて毛のなくなつたことに氣がついたとき、

大きにむつとして、

「床屋は何といふうつけものだらう。私を起す筈のところを、間違つて坊主を起した。（「世界小話」に據る）

二二　五賢堂

皇太子殿下
今ノ天皇陛下

三島中洲
名ハ毅
漢學者
文學博士
宮内省御用掛
大正八年薨
年九十

客若し大磯の滄浪閣を訪はゞ、洋館より海岸に向つて一段低き處、東の方には小田原より移植せる無數の梅樹槎枒として偃蹇せるを見ん。梅林中に一堂宇あり、方九尺、堂中東西の兩壁に三條岩倉・木戸・大久保四公の肖像あり。南方の壁間高く皇太子殿下の御筆に成る四賢堂の大額を奉掲す。北壁の一額は三島中洲翁の四賢堂の由來を記せるものな

四賢堂

余
古谷久綱

り。公の四賢を尊崇するの厚きは公に親炙せる人々の熟知する所なり。十年前、余は公に謁して日尚淺かりし時、一日公に導かれて滄浪閣上の應接間に入りたるに、此處にも四賢の肖像あり。公は余を顧みて曰く、「此の四賢は余の先輩なり。四賢は各、其の性質・傾向を異にしたれど、均しく余の畫策を最も善く採用しくれたる人々なり」と。又兩三年前、公に陪して參内し、途二重橋前を過ぎしとき、公は余に向ひて「敕許を得て

此の邊に四賢の銅像を建設したきものなり」と語られたる事もあり。其の外、政客と談論する際、公が「斯くては余は四賢に對して地下に相見ゆる面目無し」と言はるゝを耳にしたること屢、なり。亦以て公が四賢の後繼者たるを自任し、四賢の遺志を貫徹せんとする念慮の如何に切實なりしかを見るに足るべし。滄浪閣前に四賢堂を建設せるは今

伊藤博文

より僅に七年前なれども、公の腦中には、蓋し三十年前既に無形の堂宇を築きて、一賢簀を易ふる毎に其の肖像は高く壁間に掲げられたりしならん。

公在世の日、四賢堂内には一箇の洋卓と一脚の椅子とあり。卓上の花瓶には榊を供へ、毎月朔望之を新にするを例とせり。公の滄浪閣に起臥せらるゝや、時にシガーを手にしたるまゝ堂内に入り、悠然として椅子に就き、仰ぎて四賢の像に對し、俯して冥想に耽らるゝこと尠からざりき。公薨ぜし後、夫人、大森本邸に在る公の靈を堂中に分祀し、朝夕神饌を供へて奉侍すること生者に對するに異ならず。是に於てか、四賢堂は、今や名實ともに五賢堂となれり。

二三　明治天皇の御遺物

笠井信一
當時ノ巖手縣知事
今貴族院議員
慶應元年（一八六五）生

（「藤公餘影」に據る）

先月
大正二年一月

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰出されましたので、例刻に參内致しましたところが、十一時すぎ特別の思召によつて權殿參拜を許されました。權殿と申すは崩御の後、一年間、皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には長く茲に在らせら

れて、德教を御敷きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられる等、宏謨雄圖一にこの中で御定め遊ばされたのでございます。然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外な事で、平常私共が參内の節、休息を許される御部屋の方が却て遙に御立派である。餘り廣くない二間續きの御部屋で、檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も御椅子も實に御質素なもので、絨毯の如きは最初敷かれた儘のもので、後には色も大分褪めて參りましたので、侍臣から御取替のことを屢〻願ひ出ましたが、御許がなくて、遂に今日に至つたのださうでございます。

此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。此の御部屋には、先帝の御學問所に於て御使用になつた御遺物全部其の儘に据置かれてございます。これは今上天皇陛下の大御心に出でさせられたる趣に拜承致しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も昨年七月十三日即ち先帝最後の出御當時の儘に御備附になつてございました。床の間には其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には御劍數振横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどとは思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜觀する

光榮を得ました。

まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に燒痕がございます。是は先帝が御煙草を召上つていらつしやつたとき、臣下より政務の言上がありました。先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草が墜ちて此の燒痕がつくやうになつたのだと申すことでございます。さて此の燒痕のあるテーブルの羅紗を御取換へ申し上げんがため、侍臣より幾度となく願ひ出ましたけれども、斷じて御許がなかつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉德の至と拜察し奉ります。

御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣から御取寄になつた竹製の品でございます。そのなかの筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに御使ひふるしに成り、墨も亦同樣で、一寸位に磨りへらされた品もございました。鋏も亦同じく普通市場にある品で、其の傍に學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍從の方が何かの調

宸筆
花くはし櫻　あれと此やとの世世のころゝを我はとひけり

明治天皇宸筆（德川圀順侯藏）

に用ひた儘、其處に置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと承つて、今更ながら御儉德の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷かれてございます。これは青山御所においで遊ばされた頃から、久しく御使用になつたもので、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れるやうになりました。そこで侍臣より御取換を願ひ出ましたが、「なに、これでよい。」と仰せられて御許がない。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許を得た。併し適當の皮がないことを言上致しました處、何の皮でもよいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申すことで、侍從が「此の邊が犬の皮です。」と說明して居られました。

其の傍にホワイトシャツを入れる白いボール箱やうのものが澤山に積重ねてございましたから、「何に遊ばす物か。」と侍從に尋ねました處、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとて御手許に留置かせられたものであるとのことでございました。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は一枚たりとも御棄て遊ばさず、隨時御詠出の御製を

御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して御歌所に御廻し申したのださうでございます。實に天下の物は用ひるに其の途を以てすれば一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は務めて御節約相成り、些かにても冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。一天萬乘の大君におはしましながら、禿びたる御筆を御用ひになり、破れたる敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか。皆是、節すべきを節して有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

偖、御次の間には、造花や彫刻や種々な物品が備へられてございました。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御奬勵の爲御持歸り、又は御買上げにならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはてゝ殆ど裝飾の用を爲さぬものまで其の儘になつてございます。その他美術工藝品の如きも皆御奬勵のためで、俗人の好みとは全く趣を異にしていらせられます。御製

に、

千よろづの民と偕にも樂しむに

ますます樂みはあらじとぞ思ふ。

とございますが、實にこのやうな御樂みを求めさせられんが爲、先帝には長い年月の間、大なる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は先帝の長き御心づくしの御蔭を以て隆々として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば我等は長い間、聖天子御一人に非常の御苦勞をお掛け申し上げましたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に

國民のちからのかぎりつくすこそ

わが日の本のかためなりけれ。

の御製をも同時に服膺して、公人としても私人としても力のあらんかぎりを盡し、以て「我が日の本のかため」のため應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。（嚴手縣學事彙報）

二十七日
明治三十七年七月

二四　太白山の激戰

明くれば二十七日、旅團長より次の命令が下つた。

前日來ノ將卒ノ勇敢ナル動作ヲ嘆賞ス。旅團ハ本日午後五時ヨリ太白山東方一帶ノ敵ヲ攻擊スル爲、全砲兵ヲ

以テ砲擊ヲ加ヘ、左翼隊ハ砲擊ノ熟スルヲ待ツテ前進シ、敵ヲ攻略セントス。其ノ聯隊ハ此ノ好機ヲ逸セズ、死力ヲ竭シテ當面ノ敵陣ヲ占領スベシ。

午後五時は來た。我が全砲兵は一齊に砲門を開き、歩兵も亦全力を擧げて射擊を始めた。天地は忽ち硝煙に鎖された。飛彈の響は山谷を劈かんばかり。今度のは決戰であつたから、其の激しさは形容の語がない。我が歩兵は擊つては進み、止つては擊ち、奮進又奮進。されど霰と落ち來る敵彈は眞向きに前進するのを沮む。「小隊長殿」と微かに響くは最後の感謝。あつと叫ぶは三寸息絶ゆる聲。さりながら今は戰友の死を顧みるべき場合でない、一歩でも前進

して敵陣に迫らねばならぬ。「旅團長閣下の命令には死力を竭せとあつたぞ。たゞ進め。進んで死ね。今は半歩も止るべきときではないぞ。」と、將校は軍刀を揮つて、戰線を彼方に走り此方に駈けて士氣を鼓舞してゐた。豫備隊たりし一箇小隊も工兵も亦第一戰へ增遣せられた。

我が第一大隊は、遂に敵前實に二十米の近くまで肉薄した。されども、前に立塞がつて居るのは屏風の如き岩山で、殆ど一つの足場も無いので、如何にあせつても攀登ることが出來ぬ。側面からは敵彈がばら〳〵飛んで來る。正面に向つた第二中隊は唯敵の機關砲の標的となるばかりで、見る見るうちにばた〳〵と仆れる。一彈は松丸大尉の劍身を

貫いて左眼を掠めた。而して又我が砲兵の射擊は花火のやうに空中で破裂したゞけのことで、敵の防禦工事に對しては、一つの効力をも奏さなかつたらしい。「榴霰彈では役に立たぬ、榴彈を爆發せしめて敵壘の掩蓋を碎破しなければならぬ。これが爲には我が歩兵が損害を受けても致方が無いから、とにかく、早く榴彈を發射してくれ」と砲兵隊へ頻に傳令を派遣したが、一人として歸つて來るものはない、皆途中で僵れてしまつた。工兵の小隊長に「爆藥を送つて來い」と命じたが、それも間に合はなかつた。

七時も過ぎ、八時・九時ともなつたけれど、形勢は依然として發展せぬ。彼此する中に、夜は已に更けた。物凄き下弦の月は淡く戰場を照して、陣地の半面を朧に露して居た。この時、左翼隊なる第二大隊長内野少佐より聯隊長にあてゝ左の意味の通報が來た。

我ガ大隊ハ今ヨリ全滅ヲ期シテ突擊ニ移ラントス。貴官モ共ニ攻勢ニ轉ゼラレンコトヲ希望ス。予ハコヽニ謹ンデ告別ノ敬意ヲ表ス。

折しもあれや、遙に左翼の方に當つて、嚠喨たる「君が代」の喇叭が聞えた。月影細き空を傳ひ、餘韻微かにながく曳いて、予等の腦裏に一入深く沁み渡つた。「君が代」の喇叭の聲は恰も陛下御身親ら「前へ」と號令せらるゝかの如くに感じられて、將卒は勇氣百倍、乍ち奮躍して、彈雨を冒し巖石を攀ぢ

て猛進し、大喊聲を放ちつゝ敵壘に突入した。眞黑に固まつた一團の先頭に立つたる松村少佐は聲を怒らして、

「突つこめ、突つこめ。」

「君が代」の喇叭はなほ盛に起る。各隊は續いて「萬歲々々。」を連呼して聲援を與へた。山上には劍尖相擊つて火花を散らし、接戰搭鬪「これぞ大和男兒の最後の肉彈なるぞ。傲慢無禮の此の仇、今ぞ思ひ知れや。」と、打込む太刀筋に血を流す伏屍の數知れず。慘といへば慘の至であるが、窮苦の極始めて敵を破り得たる我等が愉快は如何ばかり。海嘯の如き一團の後からは又一團と、我は續々兵力を增加するので、敵は遂に此の猛烈なる攻擊に堪ふること能はず、時は七月二十八日午前八時、東天紅を染出したる頃、我が軍は確實に太白山一帶の高地を占領した。軍旗はひら〳〵と陣頭に翻り、萬歲の聲は潮の如くに涌いた。（「肉彈」に據る）

二五　汝の母

英國の一飛行士官が、敵の飛行機を射落した時の事である。敵機の地に落ちるやいなや、敵の塹壕の前と知りつゝ、敵機の跡を追つて着陸した。見ると、敵機の翼は折れ、乘組士官の體は地に横たはつて、呼吸は既に絶えて居つた。敵ながら、今まで空中に飛行して居つた時の事を思ふと、そゞろに

物がなしく、屍體を片附けてやらうとして、胸のポケットの邊に手を觸れると、何か堅い物がある。取出して見ると、一葉の寫眞で、それに「汝の母」と書いてある。空中戰の最中にも、母の寫眞だけは身につけて居つたのである。取敢へず屍體を味方の塹壕へ運んで置いて、更に一回の空中戰を試みたが、幸に武運强くて安全に味方の戰線に歸つた。歸るとすぐ其の屍體を處理したが、其の間は塹壕中の敵兵も一向發砲をしなかつたのは、それと知つたのであらうか。

その夜、英國士官の思は、射殺した敵と其の老母の上、つゞいて我が身の上から早く亡くなつた我が母の事に馳せて、感慨に堪へず、終夜まんじりともしなかつた。寐られぬまゝに、不幸なる敵の母へ手紙を認めた。

私はイギリスの飛行士官でございます。

今日、私はドイツの一飛行機を射落して一つの功名をしましたが、乘組の士官が死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏して居たのを發見し、其の母御たるあなたに此の手紙を差上げるのでございます。

私は御子息を殺しました。勿論、其の人を憎んでの事ではございません、又母御たるあなたの御心を察しないのでもございません。只これが戰爭といふ殘忍な仕事に於ける私の義務であつたのです。敵士官即ちあなたの御子息が味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られ

たなら、其の結果、味方は必ずやそれだけの攻撃を受けて、味方の兵何人かの生命は、其の爲に亡くなつてしまひます。此の不幸を防ぐ爲に、私は敵機を射落しましたが、其の乘組士官の遺骸からあなたの寫眞を發見して、感慨に堪へないのでございます。

私は子供の時に母をなくしました。今でも人の母を見て羨ましく思ふのでございます。で、私の殺した敵士官が、あなたといふ母御をもたれ、最期までもあなたの寫眞を抱いて居られたのを見ては、自分にはじつとして居られない感じがします。彼の人はもはや此の世の人ではございません。あなたも其の報知を得て、さぞ悲歎に暮れて居られませう。殺した私があなたに手紙を上げられた義理ではないとも思はれませうが、私としては、その人の母御に對して、丁度我が母に對する樣な親しい感じがするのでございます。私は御子息を殺しました。併し今私があなたの寫眞を前に置いてあなたに向つて話をして居るのか、又は私が亡き母に向つて

空中戰

手紙を書いて居るのか、自分には區別がつきません。唯筆先に涙のはふり落ちるばかりでございます。

御子息を殺したのは、戰爭といふ殘忍な惡魔の仕業でございます。あなたも又亡くなつたあなたの御子息もさう思つて、私の罪を赦して下さるでせう。そして、又御子息の亡くなられた代りに、わたしは一人の母を得た樣な思のするのを察して下さるでせう。今私の書くこの手紙は御子息と私と二人の魂が――殺された御子息と殺した私の眞心が――一緒になつて書くのだと思つて下さい。

もう此の上には何も書けません。御察し下さい。

此の手紙はイギリス軍の本營から本國外務省へ送られ、それから中立國の手を經てドイツなる宛名の人に屆いた。

それを讀んだ時の老母の感じはどんなでございましたらう。

數日の後に長い手紙がその英國士官へ參りました。

悴の戰死は承知して居りましたが、あなたから、こんな情深い御手紙を請取らうとは思ひも懸けませんでした。

通常ならば、悴の仇といふべき所ですが、御手紙を見ますと、悴が再生して、此の母に手紙を贈つてくれた樣に思はれるのです。あなたが悴の懷にあつた私の寫眞に對して、亡き母に對する心持がすると云はれる樣に、あなたの御手紙は私にとつては戰死した悴の手紙としか思はれ

ません。あなたは、悴を殺したといはれます事又實それに違ひはありますまい。併し殺すも殺されるも、御互の國の爲で、個人としては何の怨もありは致しません。只仇といふべきあなたが私を母の如く思ひ、私も亦あなたが死んだ悴の身代りの樣に思はれるのは、何たる不思議な事でせう。

併し、思へばこれも不思議ではございません、同じく神の愛子として、御同樣に眞の愛情を汲み得るのです。死んだ悴もあなたを兄弟と思ひ、つゆ怨がましい心を懷かず、今は天上に居つて、この世に生殘つた母と又不思議に兄弟になつたあなたと又他の兄弟との爲に、心の平和を得る樣、神樣に御願をして居るに違ひございません。

三人の男子の中、戰死したのは末子ですが、二人の兄もやはり戰線に出て居ります。何時弟と同じ運命になるかも分りません。併し私は、末子の戰死した爲にあなたといふ新な子を授つて、益、深く神樣の御心を汲み得ましたやうに、今後如何なる不運が來ようとも、神に對する信仰はそれで却て厚くなる樣にと祈つて居ります。

やがて戰爭が濟み、平和の時が來て、そして二人とも無事に歸る事になれば、私のこの家へ一度あなたに來て戴きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。その時には、あなたは死んだ悴とあなたと二

人分の子として弟として、私の家庭にいつまでも滯在して下さい。私はその日の早く來るやうにと祈つて居ります。

そして最後には「汝の母」と書いてあつた、彼の寫眞にあつた通りの筆蹟で。（時局に關する教育資料」に據る）

Pass

二六　ナイヤガラの壯觀

黑板勝美
歷史家
文學博士
東京帝國大學教授
明治七年生

北米合衆國と英領加奈陀との境、平野遠く連なるあたり、オンタリオ湖とエリー湖とを通ずるナイヤガラ河に懸れる大瀑布の壯觀に至りては、實に水の奇絕怪絕なるものといはねばならぬ。毎年四方から集り來る遊覽の客が無慮七十萬人に上るといふも當然のことであらう。米人は此の天然を利用して四十萬馬力の水力發電所を設け、幾多都市の電燈、幾百哩の電氣鐵道等に供給し、且製造工業の原動力として盛に之を用ひてゐる。されば、ナイヤガラの一小市は、啻に米國の勝地として天下に名高いばかりでなく、又工業の一中心たらんとする勢になつて居る。是、實に米國に於ける天然の大と人工の大とを縮寫したものといつてよい。

ナイヤガラ停車場を出て馬車をプロスペクト公園に驅れば、近く一千六十呎の廣さなる亞米利加瀧は、ゴート島を隔てゝ廣さ三千呎の加奈陀瀧と並んでゐる。共に一百六十

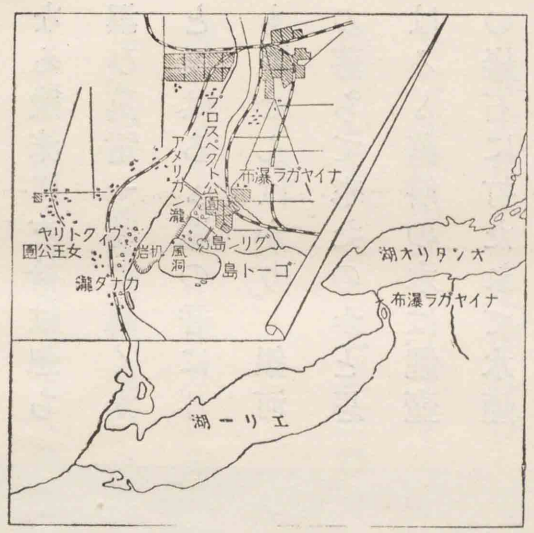
呎の高處からさながら白簾を懸けたかのやう、漲り落ちる水量は實に一分間一千五百萬立方尺。兩崖の斷巖絶壁高く聳えたる間を流れ行く急流箭よりも速き處、觀客を滿載した小蒸氣船の上下するなど、氣宇が頓に大きくなるやうな、そして、ぞつと毛髮が竪つやうな、一種言ふに言はれぬ感を生ずる。

併しながらナイヤガラの壯觀は此の遠望に盡きるものではない。亞米利加瀧の上、奔馬の如き急流に横たはれるグリーン島を越えてまた橋を渡れば、木立繁きゴート島となる。下流遙に架れる八百四十呎の大鐵橋を望み、亞米利加瀧を右に、加奈陀瀧を左に控へつゝ、巨人の如く優然として

その間にある島の一角に佇めば、霧となり雨となる飛沫に衣衿は忽ち濕ひ、萬雷一時に轟くかと疑はるゝ瀧の音に耳も聾せんばかり。銀河の落ちて來たのかと思はるゝ萬斛の水は、瀧壺の巖石に打たれて水煙高く蒸騰し、夕陽と相映じて中天に描き出す一

ナイヤガラ瀑布

條の長虹、たとひ如何なる名手を傭ひ來るとも、此の壯と美とを兼ねたる絶景を寫すことはむづかしいであらう。



ナイヤガラ附近圖

ゴート島の傍に月島と稱する小さい岩島が横たはつて居る。明月の夕、月光に映ずる水煙が虹を生ずる奇觀より此の名を得たとの事であるが、ゴート島の奇勝は實に此の瀧壺の邊に至つて窮るのである。島の兩端に沿ひ、斷巖の麓へと小徑を辿り下つて瀧壺の傍に出で、更に進めば、その後には名高い風洞（ウインドケーブ）がある。一たび此の洞中に入れば、矗立した絶壁の間に凄然たる風の音、轟轟たる瀧の音、耳は遠くなる、眼は眩む、呼吸さへも止るやう。

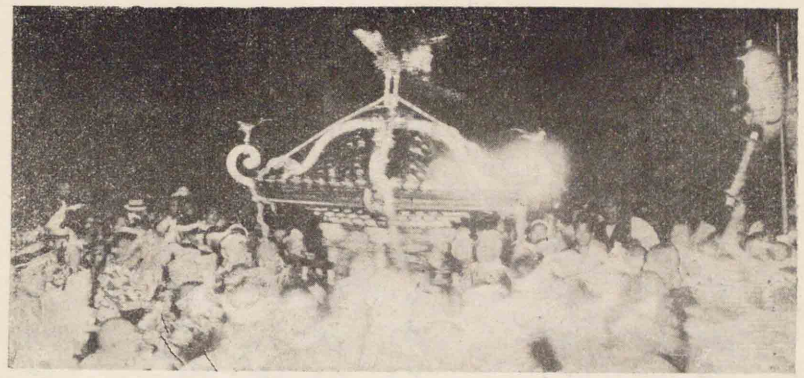
舊路を傳つて二たびゴート島の上に出で、漸く人心地のついた後、プロスペクト公園に馬車をかつて、先に望んだ大鐵橋を渡つて加奈陀領に入り、机岩（テーブルロック）の邊に至れば、數萬年の間落下した水力に、何時しか馬蹄鐵の形をなせる加奈陀瀧の渾然として雄大なる光景は亞米利加瀧の遠く及ぶ所ではない。昇降機で瀧壺の後に出る仕掛、ヴィクトリヤ女皇公園の設備など、加奈陀も此の勝景に對して出來るだけの力を盡して居る。（歐米文明記）

北原白秋
名ハ隆吉
詩人
明治十八年生

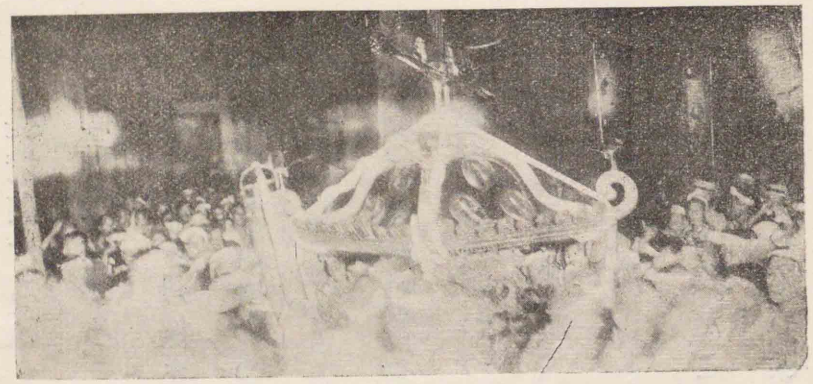
二七　お祭

北原白秋

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
祭だ、祭だ。
背中に花笠、
胸には腹掛、
向鉢巻、そろひの半被で、
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
神輿だ、神輿だ。
神輿のお練だ。
山椒は粒でも、ぴりつと辛いぞ、
これでも勇みの山王の氏子だ。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
眞赤だ、眞赤だ、夕燒小燒だ。
しつかり擔いだ。



明日も天氣だ。
そら揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
俺らの神輿だ。死んでも離すな。
泣蟲やすつ飛べ。差上げて廻した。
揉め、揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。



わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
廻すぞ、廻すぞ、
金魚屋も逃げろ、鬼燈屋も逃げろ。
ぶつかつたつて知らぬぞ。
そら退(ど)け、退け、退け、
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
子供の祭だ、祭だ、祭だ。

提燈點けろ、
御神燈獻げろ。
十五夜お月様まんまるだ。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
あの聲何處だ、
あの笛何だ。
あつちも祭だ、こつちも祭だ。
そら揉め、揉め、揉め。

わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
祭だ、祭だ。
山王の祭だ、子供の祭だ。
お月様紅いぞ、御神燈も紅いぞ。
そら揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、

わつしよい、わつしよい。（トンボの眼玉）

夏目漱石
名ハ金之助
文學者
大正五年歿
年五十

二八　猫

夏目漱石

吾が輩は近頃運動を始めた。如何なる種類の運動かと不審を抱く者があるかも知れないから、一寸説明しよう。吾が輩は不幸にして器械を持つ事が出來ない。だからボールもバットも取扱ふことが出來ない。次には金がないから買ふ譯に行かない。此の二つの理由からして、吾が輩の選んだ運動は一文入らず器械なしと名づくべき種類に屬するものと思ふ。

主人の庭は竹垣を以て四角にしきられて居る。緣側と並

行して居る一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間に過ぎぬ。今吾が輩の云つた垣巡りと云ふ運動は此の垣の上を落ちない樣に一周するのである。是はやり損ふこともまゝあるが、首尾よく行くと御慰みになる。ことに處處に根を燒いた丸太が立つて居るから、一寸休息に便宜がある。今日は出來がよかつたので、朝から晝迄に三遍やつて見たが、やるたびにうまくなる。うまくなる度に面白くなる。到頭四遍繰返したが、四遍目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで來て、一間許り向ふに列を正してとまつた。

「是は推參な奴だ、人の運動の妨げをする。ことにどこの烏

だか籍もない分際で、人の塀へとまるといふ法があるもんか。」と思つたから「通るんだ、おい退き給へ。」と聲をかけた。眞先の烏は此方を見てにやゝ〳〵笑つて居る。次のは主人の庭を眺めて居る。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いて居る。何か食つて來たに違ひない。吾が輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて垣の上に立つて居た。烏は通稱を勘左衞門と云ふさうだが、成程勘左衞門だ。吾が輩がいくら待つてゝも挨拶もしなければ飛びもしない。吾が輩は仕方がないからそろ〳〵歩き出した。すると眞先の勘左衞門がちよいと羽を廣げた。やつと吾が輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向きから左向きに姿勢をか

へただけである。

此の奴め、地面の上なら其の分に捨て置くのではないが、如何にせん只さへ骨の折れる道中に、勘左衞門などを相手にして居る餘裕がない。といつて、又立ち留まつて三羽が立ち退くのを待つのもいやだ。第一さう待つて居ては足がつゞかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな處へはとまりつけて居る。從つて氣に入ればいつ迄も逗留するだらう。こつちは是で四遍目だ。只さへ大分勞れて居る。況や綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさへ落ちんとは保證が出來んのに、こんな黑裝束が三個も前途を遮つては容易ならざる不都

合だ。愈〻となれば自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさう仕らうか。敵は大勢の事ではあるし、ことにはあまり此の邊には見馴れぬ人體である。口嘴が乙に尖つて、何だか天狗のまうし子の樣だ。どうせ質のいゝ奴でないには極つて居る。退却が安全だらう、餘り深入りをして萬一落ちでもしたら猶更恥辱だ。と思つて居ると、左向けをした烏が阿呆と云つた。次のも眞似をして阿呆と云つた。最後の奴は御丁寧にも阿呆阿呆と二聲叫んだ。如何に溫厚なる吾が輩でも是は看過出來ない。第一自己の邸内で烏輩に侮辱されたとあつては吾が輩の名前にかゝはる。名前はまだないからかゝはり

やうがなからうと云ふなら、體面に關る。決して退却は出來ない。諺にも烏合の衆と云ふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。「進めるだけ進め。」と度胸を据ゑてのそ〳〵歩き出す。烏は知らん顏して何か御互に話をして居る樣子だ。愈〻肝癪に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合はせてやるんだが、殘念な事にはいくら怒つてものそ〳〵としかあるかれない。漸くの事先鋒を去ること約五六寸の距離まで來て、もう一息だと思ふと、勘左衞門は申しあはせた樣にいきなり羽搏きをして一二尺飛上つた。其の風が突然吾が輩の顏を吹いた時、はつと思つたら、つい踏み外してすとんと落ちた。

これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽とも元の處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾が輩の顏を見おろして居る。圖太い奴だ。睨みつけてやつたが、一向利かない。背を丸くして少々唸つたが益〻駄目だ。俗人に靈妙なる詩の意味が分らぬ如く、吾が輩が彼等に向つて示す怒の記號も何等の反應を呈しない。考へて見ると無理のない所だ。吾が輩は今まで彼等を猫として取扱つて居た。それが惡い。猫なら此の位やれば慥かに應へるのだが、生憎相手は烏だ。烏の勘公とあつて見れば致し方がない。機を見るに敏なる吾が輩は到底駄目と見て取つたから、綺麗さつぱりと緣側へ引上げた。（吾輩は猫である）

二九　十國峠

高山樗牛

高山樗牛
名ハ林次郎
評論家
文學博士
明治三十五年歿
年三十二

嘲風
姉崎正治
宗教學者
文學博士
東京帝國大學教授
明治六年生

十國峠の登臨は、こよなう壯快なる遊なりき。此の峠は、函嶺より天城に連る所謂富士火山脈の一峰にて、巔に上れば、關の東西より豆州の沖かけて、十國・五島を眺め得べしとぞ。ある日、空晴れわたりたるに、われ嘲風とこゝに遊びき。山の巔は熱海より五十町を出でざれば、いたう高しとは言ひ難し。されど、相・駿二州に跨りて、北は足柄・箱根・富士より、南は天城・神子元島より、大島・三宅島の山々を望み、西は江浦・靜浦を眼下に見おろし、名も高き田子浦づたひに、淸見潟より三保松原かけて、遙に遠江なる御前崎に至るまで、東は眞

鶴崎のあなた、小田原・國府津・淘綾の磯邊に沿うて、江島・鎌倉の山々より、田越・三崎のはてに至るまで相模灘を包みて、かすかに安房・

十國峠附近圖

上總の遠巒を望む。景物の壯大、類ふべきものなし。殊に美はしきは、江浦より清水に至るまでの田子浦の景色なり。富士の裾野を縫へる小松原の濃き綠なるが、蒲原・興津わたり淡き紫にうすれゆけるさま、心ゆくばかり嬉しく、天つ少女の天降りけん三保松原の春霞こめたるが、此の世ならず見ゆるもゆかし。仰げば高き富士が嶺の千古の姿は言ふもおろかや。あゝ誰が作りなしけん自然の麗しさよ。

箱根の一峰に雲起りぬ。はじめは膚寸の大きさなりしが、谷開け、風加りて、漸く擴り、はては八峰の全面を掩ひて驀然として西の方にたなびきぬ。愛鷹の峰にかゝるころ、富士

風に逆らひたるにや、雲行忽ち天に向ひて、二山の間に白雲の壁を築けり。其の頂、山風に散じて滿天を覆ひ、濛々として咫尺を辨へず。我、衣襟をあはせて、凝眸すること多時。嘲風杖を揮つて天を劃し、快哉を絶叫すること三たび。少時にして空霽れて、函嶺の崔嵬、富嶽の清容、もとの如し。滿天の雲霧、その何處にゆきたるかを知らざりき。（樗牛全集）

三〇　月の天橋

徳富健次郎

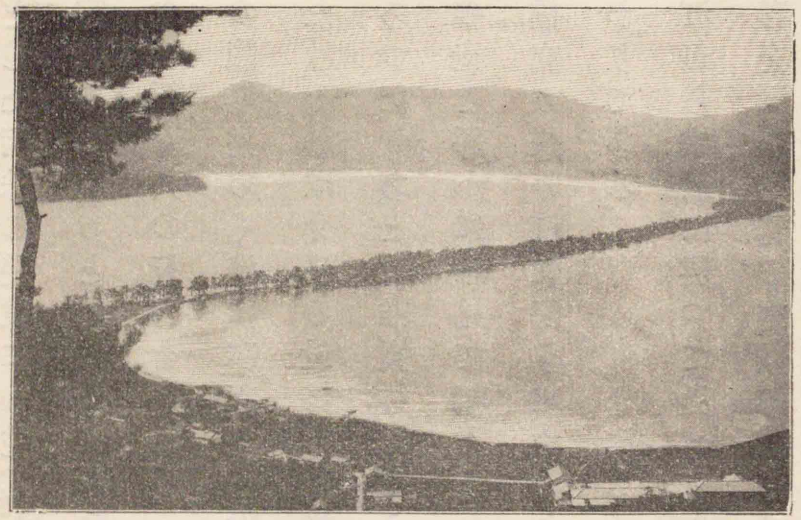
ぎいと艪が響いて、舟は墨染の濃い松陰から、白々とした月下の海に出た。海と云つても淺い洲の水である。何といふ好い月夜か。雲一つ無い空にのみ照るかと思へば、水中に天あつて、其處にも月は璧の如く光つて居る。何といふ清い水だらう。月明にも水底の砂が分明に數へられる。此處は橋立明神の渡か。若しくは銀河をいま渡つて居るのではあるまいか。船頭よ、ゆるやかに舟をやつてくれ。もつと徐かにやつてくれ。しかし如何程徐かに舟をやつても、彼岸は近い。するく と舟はもう天橋の渚に着いてしまつた。

舟からあがつて踏む白砂は、もう天橋立である。此處らは植ゑついで間もないと見え、松は若松で、疎らである。月光に雪とかゞやく砂を踏んで段々奥へ入つて往く。歩むに連れて松影は段々深くなり、果ては月の光より松の影が多

くなつた。

何といふ明るい月だらう。仰げば松の一葉々々が白金のピンを數ふる如く讀まれ、俯く砂にはまた一葉々々の影が黑く鮮かに讀まれる。

松の間の路の曲る處に來た。余は松の幹に倚つて立つた。ひつそりした天橋立に人籟絶えて、唯何處からともなく、ざあざあといふ響がする。松風か。否、足下の松影は濃い黑もて描いたやうに少しも動かぬ。音響は與謝の海が天橋一里の白砂を舐める響に外ならぬのである。其の響に惹かれて汀に出て見る。其處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。腰をかける。月下にほの白く眠る與謝の海。



天の橋立

其の懷には璧の様な月を抱き、寐息かとばかり、ざぶり又ざぶりと白砂にこぼれる漣は、まるで眞珠をこぼすやう。海の南に、半圓形に山根に沿うて紅寶石や琥珀の光が點々と灣を緣どつて居るのが宮津の町である。

ふと此方の海の上に不思議なものが現れた。晃々

とした明珠の幾段にも並んだ尨大な横長い物である。龍宮城の出現。と見る間に、それは宮津の方へ動いて行く。やゝ暫く其の行方を見送る。龍宮城は彼の宮津灣頭百千の龍燈晃めく邊にぴたりと附いてしまつた。龍宮城と見たは、それは今日の最終の連絡船が宮津を指して行くのであつた。あとは唯熨したやうな與謝の海。照りまさる月の空と靜かに相見て相抱き、一里の松原枝も鳴らさぬ天の橋立の長い汀に傍うて、ざぶり又ざぶりと漣がさゝやくばかりである。

汀から松原に戻つて、奥へ〳〵と砂路を歩む。さく〳〵と砂を蹈む足音の絶間に、波のさゝやきが慕うて來る。幽かに蟲の音がする。松影は益深くなつて、はては砂の上にこぼれる月影がちら〳〵と螢ほどに細く疎になつた。と見ると、こゝにひつそりと鎭ります社がある。大方橋立明神といふのであらう。松影を浴びた其の宮に人影もない、人聲もない。燈明一つ點つて居ない。余は其處の松に倚りかゝつて良久しく立つた。

大分經つて、松影から外に出て歸途に就いた。砂路をまたぶらり〳〵と切戸の渡に來た。切戸の水は全く銀河のごとく美しい。汀に立つて向ふを見れば、眞黑い彼岸に唯一つ赤い灯が見える。文殊の渡守の小舍の灯である。

「おうい〳〵」。

渡を呼ぶ余の聲が震へて銀河を渡る前、余は月の天橋の端に立つて、暫く其の灯を眺めて居た。（死の陰に）

中學國文教科書　卷一終

文部省檢定濟
大正十二年十一月十六日　中學校國語科教科書

明治三十九年十月十五日印刷
明治四十年十二月廿三日修正八版發行
明治四十四年十一月十八日修正九版發行
明治四十五年十二月廿五日修正十版發行
明治四十三年十一月十一日修正十一版發行
明治四十四年十一月十日發行
明治四十四年十一月廿八日修正十二版發行
明治四十四年十一月十五日修正十三版發行
明治四十五年十二月廿六日修正十四版印刷
大正元年十二月廿三日修正十五版發行
大正二年十月十五日修正十六版發行
大正三年十一月十日修正十七版發行
大正四年十一月十五日修正十八版發行
大正六年十一月廿八日修正十九版發行
大正七年十一月廿五日修正二十版發行
大正十年十一月十日修正二十一版發行
大正十一年十一月十七日修正二十二版發行
大正十二年十一月十六日修正二十三版發行
大正十二年十月十八日修正二十四版印刷
大正十二年十月十五日修正二十五版發行

中學國文教科書全十冊

定價　大正十四年度臨時定價
卷一・二　各金三十七錢　金六拾七錢
卷三・四　各金三十四錢　金六拾一錢
自五至十　各金三十六錢　金六拾五錢

著作權所有

編者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平
發行兼印刷者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區通神保町六番地　光風館書店（電話大手七三四〇番　振替口座東京三二七番）

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

（東京秀英舍印刷）

Hiromu Oita

光風館發行國語科教科書

東京高等師範學校教授 吉田彌平編
師範學校 **國文教科書** 本科用全六冊 第二部用全一冊

東京高等師範學校教授 高野辰之編
中學 **國文教科書** 修正十五版 全拾冊

東京高等師範學校教授 東京帝大文學部助教授 文學士 保科孝一編
女子 **國文讀本** 訂正再版 全十冊

東京高等師範學校教授 東京帝大文學部助教授 文學士 保科孝一編
實業學校 **國語教科書** 修正五版 全八冊

東京高等師範學校教授 吉田彌平編
現代文新鈔 修正四版 全五冊

東京高等師範學校教授 吉田彌平編
太平記鈔本 再版 全壹冊

平家物語鈔本 再版 全壹冊

增鏡鈔本 再版 全壹冊

保元平治物語鈔本 再版 全壹冊

佐藤正範編
神皇正統記鈔本 再版 全壹冊

光風館編輯所編
徒然草鈔本 四版 全壹冊

常山紀談鈔本 再版 全壹冊

時文小編 再版 全壹冊

義經記鈔 再版 全壹冊

方丈記講本 一版 全壹冊

十六夜日記講本 一版 全壹冊

花月草紙鈔 再版 全壹冊

益軒文鈔 再版 全壹冊

文教中學校教諭 諸星寅一編
古今文選 再版 全壹冊

師範選 **徒然草讀本** 再版 全壹冊

広島大学図書
2000082067